

日本人妊産婦の食事アセスメントに影響を与える要因の検討

The investigation about factor that influence a dietary assessment among Japanese pregnancies

阿部 恵理

Eri Abe

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 健康栄養学専修

キーワード：妊婦，食事アセスメント，サプリメント，就業状況，つわり

Key words : Pregnancy, Dietary assessment, Supplement, Working situation, Morning sickness

1. 背景および目的

近年，日本の合計特殊出生率は 1.4 前後と低値で推移しており，少子化が進み人口減少が始まっている我が国にとって次世代の健康の確保は重大な課題である。胎児期の栄養状態が成人期の健康に関わっているという報告が複数あり[1, 2]，次世代の健康確保のために妊娠中に適切な食生活を送ることは非常に重要である。

妊娠期の女性の食生活を把握するためにはまず食事アセスメントを行う必要がある。食事アセスメントは単に対象者の食品摂取量や栄養素摂取量を調べるだけでなく，食事に影響を与える要因について調べることも必要となる。ライフステージによって食事に影響を与える因子は異なるが，特に妊娠期は他のライフステージと比較し特殊なライフステージである。その理由としては青年期の女性に訪れる限定的な期間であること，食事摂取基準で付加量が設定される栄養素がありサプリメントの利用者が多いこと，つわりにより食習慣や食嗜好が変化すること，女性にとって大きなライフイベントであり就業状況や生活環境が大きく変わることなどが挙げられる。妊娠期の女性の食事アセスメントを適切に行うためには，これらの因子がどのように食生活に影響を与えているかを明らかにする必要がある。

そこで本研究では妊娠期の女性を対象に葉酸サプリメントの摂取状況，つわりの症状，就業状況が食事にどのような影響を与えているかを明らかにすることを目的とする。

2. 方法

調査は平成 23 年 1 月～12 月にかけて実施した。

国立成育医療センターを受診していた妊婦に対し，無作為に研究協力の依頼をし，依頼した妊婦の女性 272 名のうち 248 名（平均年齢 34.8 ± 4.0 歳）から同意を得られた。対象者には妊娠初期および中期の二時点において，3 日間の秤量目安食事記録，食習慣および生活習慣に関する自記式アンケートを実施した。また対象者の身長や体重などの身体計測データ，対象者の児の出生体重など出産に関わるデータについては，国立成育医療センターで検診時・出産時に得たものを使用した。なお，本研究の倫理的配慮については国立成育医療センターの倫理審査委員会の承認(No.461)を得ている。

2-1. 葉酸サプリメント

3 日間の秤量目安食事記録から対象者の葉酸摂取量を算出した。食習慣および生活習慣に関するアンケートの回答から，サプリメントからの葉酸摂取量を算出した。食事からの葉酸摂取量により対象者を五分位に分け，各群のサプリメント利用率，サプリメントからの葉酸摂取量，総葉酸摂取量に対するサプリメントの寄与率を算出し，食事からの葉酸摂取量の関連とサプリメント利用について関連をみた。

2-2. 就業状況

対象者を週間労働時間に基づき，パートタイム群(n=22)，フルタイム群(n=47)，就業なし群(n=80)，に分類した。3 日間の秤量目安食事記録の結果を用いて栄養素摂取量と食品群別摂取量を算出し 3 群を比較した。

2-3. つわり

対象者を自己申告によるつわりの種類ごとに食べつわり群 (n=34)，変化なし群(n=45)，吐きつわり群(n=96)の 3 群に分けた。

3 日間の秤量目安食事記録から栄養素摂取量, 食品群別摂取量, 食事摂取時間を算出し, 3 群を比較した.

3. 結果と考察

3-1. 葉酸サプリメント

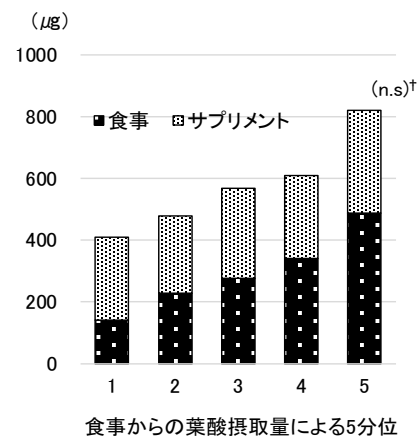
総葉酸摂取量に対するサプリメントの寄与率の平均値は $41\% \pm 28$ と非常に高かった. サプリメントを考慮せずに妊産婦の食事調査をした場合, 葉酸摂取量の著しい過小評価に繋がると考えられる. 食事からの葉酸摂取量による五分位の各群のサプリメントからの葉酸摂取量を比較すると有意な差はなかった (図 1). またサプリメント利用者の割合にも有意な差はなく, 食事からの葉酸摂取量と葉酸サプリメントの利用に関連はみられなかった.

3-2. 就業状況

パートタイム群は他の 2 群と比較し脂質摂取量に有意に高く, 脂質エネルギー比が 35%以上の者の割合も有意に多かった (図 2). また, フルタイム群は他の 2 群よりも朝食欠食の者の割合, 間食をとる者の割合ともに少なく, 規則正しい労働が食生活リズムを整える方向に影響しているのではないかと推測された. 就業状況は脂質摂取量のアセスメント, 食習慣のアセスメントに影響を与えていることが示唆された.

3-3. つわり

つわりの種類別による 3 群間の栄養素摂取量について比較すると, 食べつわり群と吐きつわり群, 変化なし群と吐きつわり群の間でエネルギー摂取量において統計的に有意な差があるため, 栄養素摂取量についても有意差のある項目が多かった. エネルギー調整を行うとほとんどの項目において有意差はなくなるが, 葉酸と不溶性食物繊維の 2 項目のみに有意差がみられ, どちらも変化なし群と比較し吐きつわり群の摂取量が少なかった. つわりの種類の違いは, 食事摂取量, 葉酸および食物繊維摂取量のアセスメントに影響を与えていることが示唆された.



†: 5 群のサプリメントからの葉酸摂取量平均値を Kruskal-Wallis の検定で比較した際の結果

図 1 食事からの葉酸摂取量による五分位別食事からの葉酸摂取量とサプリメントからの葉酸摂取量

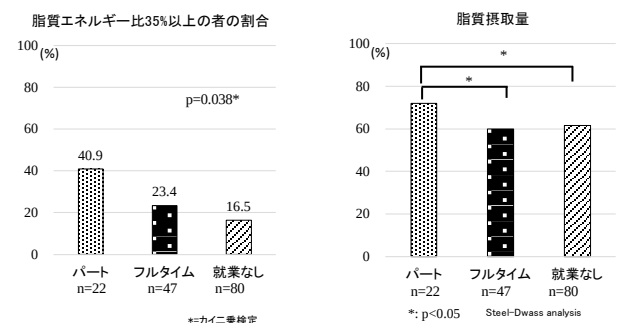


図 2 就業状況別 3 群の脂質エネルギー比 35%以上の者の割合と脂質摂取量

4. 結論

葉酸サプリメントの摂取状況, 就業状況, つわりは妊産婦の食生活に大きく影響を与えており, 妊娠期の食事アセスメントを精確に行うためには, これらの要素を考慮することが重要だと示唆された.

主要参考文献

- [1] Barker, D.J. and C. Osmond, *Infant mortality, childhood nutrition, and ischaemic heart disease in England and Wales*. The Lancet, 1986. 327(8489): p. 1077-1081.
- [2] De Boo, H.A. and J.E. Harding, *The developmental origins of adult disease (Barker) hypothesis*. Australian and New Zealand Journal of Obstetrics and Gynaecology, 2006. 46(1): p. 4-14.

化学繊維アレルギーの誘起機構に関する研究

Induction mechanism of chemical fiber allergy

土田 百恵

Momoe Tsuchida

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 生活環境学専修

キーワード：化学繊維アレルギー，ポリエステル，布帛の力学的特性，ヒスタミン

Key words：Chemical fiber allergy, Polyester, Mechanical properties of fabric, Histamine

1. 目的

近年、衣服の着用によって皮膚にかゆみや赤み等の症状を訴える人が増加している¹⁾。衣服着用時、皮膚にアレルギー反応が発症することをアレルギー性皮膚炎といい、アトピー性皮膚炎と接触性皮膚炎に大別される。いずれも衣服着用後の発汗や接触刺激により着用後の一定時間後に発症する。化学繊維アレルギーは接触性皮膚炎の一種で衣服が原因の場合、着用を中止すれば発症を回避できるため軽視されがちである。皮膚科医はポリエステルのような化学繊維ではなく綿を着用するようにと診断するが、なぜ綿がよいのか明らかになっていない。市販の衣服は、多くの化学繊維が使われているために、アレルギー性皮膚炎患者は着用する衣服を購入する際に、まず触って着用が可能かどうか判断している。このことから、アレルギー性皮膚炎患者は衣服の風合いを評価して着用の可能性を探っていると考えられる。そこで、布帛の風合いの基礎となる力学的特性値と好感度との関係を明らかにすることにより、アレルギー性皮膚炎の直接原因は何かを明らかにすることを目的とした。

アレルギー性皮膚炎患者は、汗を主因とするかゆみ等の症状悪化が指摘されている。通常、健康な人間の皮膚は弱酸性の皮脂膜に覆われ pH4.4～5.5 の弱酸性を示す。皮膚表面が弱酸性の状態では皮膚のモイスチャーバリアが正常に機能するが、発汗等による皮膚 pH が上昇すると黄色ブドウ球菌が増殖し、モイスチャーバリアを崩し、皮膚に赤みやかゆみを発症させる²⁾。アレルギー性皮膚炎患者の皮膚は、健康者と比較して水分が低く、黄色ブドウ球菌量が多く、モイスチャーバリア機

能が低いと言われている³⁾。また、汗中のかゆみ成分であるヒスタミンがかゆみを誘起することが分かっている⁴⁾。ヒスタミンは生体組織に広く分布し、特にマスト（肥満）細胞に高濃度に存在する。このことから、アレルギー性皮膚炎患者の皮膚の状態と汗中のヒスタミン含有量を測定し、かゆみとの関係を調べた。

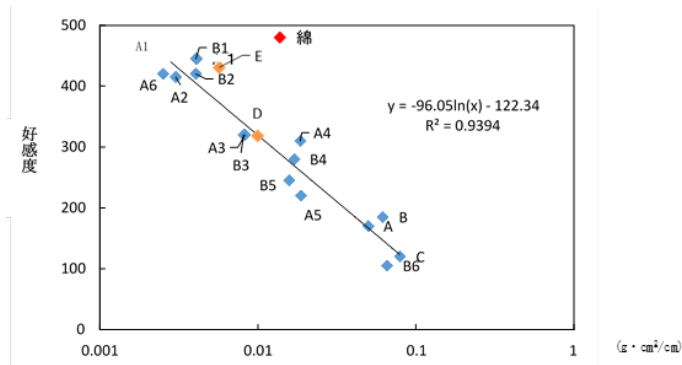
2. 方法

試料布として、6 種類の異なる未加工ポリエステルと酸導入ポリエステルおよび綿の合計 17 枚の編地を用いた。被験者は 20 歳～22 歳の女性のアレルギー性皮膚炎患者と健康者である。着用の可能性は、アレルギー性皮膚炎患者が触感による着衣の可否を好感度として評価し、試料布の力学的特性は曲げ特性、せん断特性、表面特性を KES 法で評価した。さらに、アレルギー性皮膚炎患者に試料布を着用してもらい着用感を評価した。アレルギー性皮膚炎患者の皮膚状態（水分、弾力および pH）を調べ、汗に含まれるヒスタミン量は ELSA 法を用いて測定した。

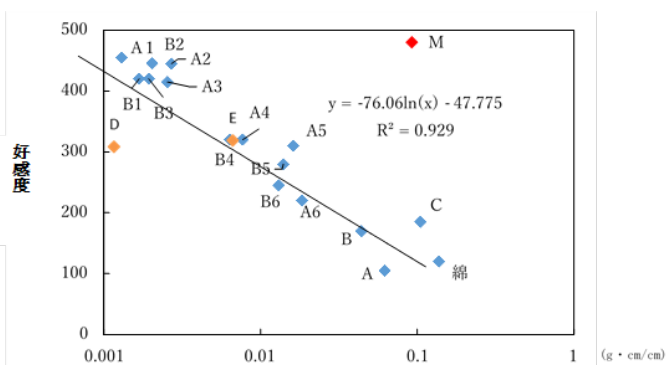
3. 結果と考察

着用の可能性を被験者の触感による好感度を指標として順位づけしてもらった結果、布帛に触った時の好感度と厚みは相関がよく（相関係数 $R^2=0.8472$ ）、薄い布は好感度が高く、布帛の厚みが厚くなるほど好感度は低くなった。繊維の種類や加工の有無とは無関係に試料布の厚みと好感度は深い相関関係があったことから、布帛の厚みがアレルギー性皮膚炎患者の着用可否の判断要因の

一つであると考えられる。布帛の曲げ剛性(B)および曲げヒステリシス(2HB)と好感度との関係は、図1に示すようによい比例関係が得られた。ともに相関係数が0.9以上であることから、曲げ特性が着用可否判断の要因であることが分かった。



曲げ剛性 (B)タテヨコ平均



曲げヒステリシス (2HB)タテヨコ平均

図1 曲げ特性値と好感度との関係

せん断特性値 (G, 2HG, 2HG5) と好感度の相関係数は、それぞれ 0.83, 0.85, 0.83 と高い相関を示したことから、着用時の布帛のせん断方向への変形のしやすさと回復性を着心地の良さとして記憶されているといえる。表面特性値 (MIU, MMD, SMD) と好感度の関係は、布帛の厚みが一定以上薄くなると自分の指の影響が強く反映され、布帛の凹凸や滑りやすさ等の人間の感覚として判断できなくなるため、一定の厚さ以上 (閾値を 0.5mm とした) の布帛を対象に調べた結果、表面粗さ (SMD) が関係していることが分かった。アレルギー性皮膚炎患者に、硬い綿と硬いポリエステル(A6, B6)を着用してもらい着用感を比較したところ、「ごわごわした」「かたい」等の着用評価に顕著な

差がみられ、柔らかくて肌触りの良いものであれば綿よりもポリエステルが好まれる結果であった。たとえ綿であっても曲げ剛性値、せん断剛性値および表面粗さ値が大きいほど皮膚刺激が強くなり不快となることが分かった。

一方、汗のヒスタミン量を測定した結果、アレルギー性皮膚炎患者は健康者より約2倍のヒスタミン量が検出された。皮膚の状態とヒスタミン量との関係は、重度の皮膚疾患ほどヒスタミン量が多く、汗中のヒスタミン量と発汗時のかゆみは関係していることが確認できた。

4. まとめ

曲げ硬さ、せん断硬さおよび表面粗さに起因する皮膚への外部刺激が皮膚炎発症の因子であることが分かった。また、アレルギー性皮膚炎患者の汗中のヒスタミン量は多く、かゆみと関係していた。以上の結果より、アレルギー性皮膚炎患者の着衣は、曲げ易く、回復性に富んだ表面凹凸の少ない布帛を選択することが第一条件となる。次いで、吸汗性があり、発汗に伴う皮膚 pH 値の上昇および黄色ブドウ球菌の増殖を抑制できる効果が付与された布帛を選択することでかゆみや赤みといった症状の悪化を防ぐことが可能になる。

主要参考文献

- [1] アトピー性皮膚炎の患者数 (平成 26 年患者調査反映版), 厚生労働省
<https://atopicdermatitis.tokyo/> (参照 2016-6-6)
- [2] 発汗前後における皮膚状態の変化に関する研究—アトピー性皮膚炎群・非アトピー性皮膚炎群の皮膚水分量・皮脂量・皮膚 pH の比較—, 井上雅子, 武山美保, 奥西紋佳, その他, 日本小児保健学会講演集 49th p.274-275 (2002)
- [3] Dysbiosis Staphylococcus aureus Colonization Drives inflammation in Atopic Dermatitis, Tetsuro Kobayashi, Martin Glatz, Keisuke Horiuchi, Hiroshi Kawasaki, Haruhiko Akiyama, Daniel H.Kaplan, Heidi H.Kong, Masayuki Amagai, and Keisuke Nagao, Immunity 42 p.756-766 (2015)
- [4] アトピー性皮膚炎発症機序の解明と皮膚バリアによる予防法の開発に関する研究, 天谷雅行, 厚生労働科学研究費補助金 平成 26 年度 総括研究報告書 (2015)

小胞体ストレスがインスリン分泌に与える影響：

小胞体カルシウムを観る

A study of relationships between endoplasmic reticulum stress and insulin secretion :
Live cell imaging of Ca^{2+} flux into/from endoplasmic reticulum

川久保 愛美

Megumi Kawakubo

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修

キーワード：インスリン分泌，リアルタイムイメージング，小胞体ストレス

Key words : Insulin secretion, Real time imaging, ER stress

1. 目的

小胞体はタンパク質の生合成や細胞内情報伝達に重要な Ca^{2+} の貯蔵など，生命維持に欠かせない役割を持つ。膵臓 β 細胞では，インスリン顆粒の細胞膜への移動・融合・開口放出という一連の過程に細胞質内の Ca^{2+} 濃度のオシレーションが重要なシグナルとなることが知られており，小胞体は Ca^{2+} の取込み・放出を通して，インスリン分泌機能の調節を行っている。一方，小胞体はストレスを受けやすい細胞内小器官の 1 つでもある。本研究では，小胞体ストレスが細胞内 Ca^{2+} 動態およびインスリン分泌に与える影響を，個々の細胞についてリアルタイムで観察する方法を確立することを目的として，脂肪酸添加が与える影響を調べた。

2. 方法

ラット膵臓 β 細胞株 INS-1 細胞を用いてすべての実験を行った。

インスリン分泌の観察：INS-1 細胞を $2\mu\text{M}$ の蛍光色素 FM1-43 で室温 10 分処理後，新しい FM1-43 を含む緩衝液中で，20mM グルコース刺激後 1 分毎に 40 分間にわたって蛍光強度の変化を経時的に観察した。

小胞体 Ca^{2+} 濃度変化の観察：小胞体移行性蛍光タンパク質 R-CEPIA（赤色蛍光）を INS-1 細胞に遺伝子導入し，3 日後に蛍光顕微鏡で観察した。20mM グルコース刺激後の蛍光強度の変化を経時的に観察した。短期の変化は 1 分ごとの 40 分間，長期の変化は 1 時間ごとに 5 時間観察した。

R-CEPIA の局在の確認：R-CEPIA を遺伝子導入した細胞を，小胞体染色色素 EverFluor FL Thapsigargin（緑色蛍光）またはミトコンドリア染色色素 MitoTracker Green（緑色蛍光）で染色し，蛍光の重なりを観察した。

脂肪酸添加の影響の解析：200 μM の脂肪酸を含む培地（パルミチン酸(PA)・オレイン酸(OA)）で 5 日間培養した細胞と対照細胞 (control) を比較し，インスリン分泌，小胞体 Ca^{2+} 濃度の変化を経時的に蛍光観察するとともに，小胞体ストレス関連タンパク質の mRNA 発現量を Real-time PCR 法によって調べた。

3. 結果と考察

1 ◆小胞体 Ca^{2+} の蛍光観察法の確立

R-CEPIA を遺伝子導入した INS-1 細胞を小胞体染色色素と共染色し観察したところ，染色域がよく重なったことから R-CEPIA が小胞体に局在していることを確認した（図 1）。グルコース刺激後の小胞体 Ca^{2+} は漸減し，また，細胞質内の Ca^{2+} 濃度やインスリンの開口分泌に見られるオシレーションが同様に観察された（図 2）。インスリン分泌のためのシグナルとして細胞質内へ Ca^{2+} が供給されていることが示唆された。さらに，小胞体内 Ca^{2+} 濃度はグルコース刺激後 3～5 時間後には回復に転じる様子も観察された。これらから，INS-1 細胞の小胞体 Ca^{2+} 観察に R-CEPIA が有用であることが示された。

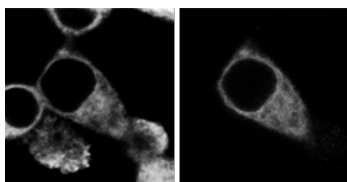


図 1. 小胞体染色色素(左)と R-CEPIA(右) 同視野内での観察

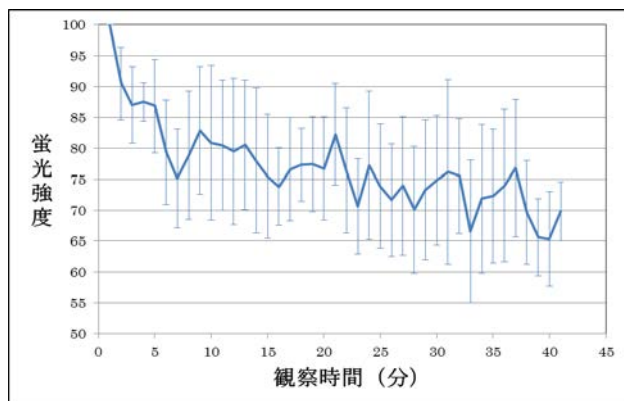


図 2. グルコース刺激後の小胞体内 Ca^{2+} 濃度の経時変化. グルコース添加時を 100 としたとき

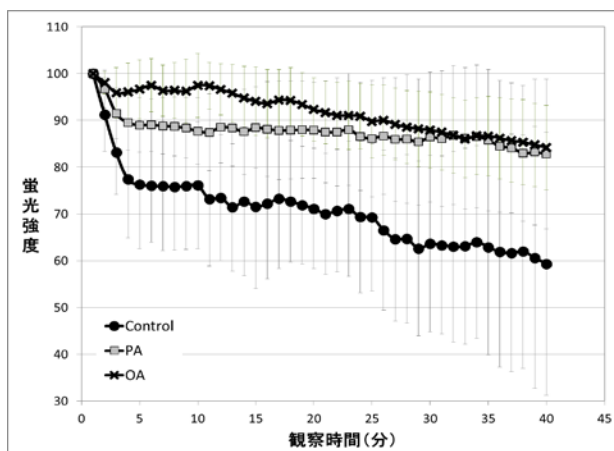


図 3. 脂肪酸添加培地で培養した細胞におけるグルコース刺激後の小胞体 Ca^{2+} 濃度の変動

2 ◆脂肪酸添加が与える影響

INS-1 細胞の小胞体 Ca^{2+} 濃度はグルコース刺激後に速やかに減少するが, PA 処理および OA 処理細胞ではその減少量が control 細胞の 1/2 以下であり, 脂肪酸処理細胞では, グルコース刺激による小胞体からの Ca^{2+} 放出が低下していることがうかがえた (図 3). また, 脂肪酸処理細胞では, 小胞体ストレスマーカータンパク質の発現量が有意に

増加しており, 脂肪酸添加が小胞体ストレスを誘引し, 小胞体からの Ca^{2+} 放出に影響を与えている可能性が示唆された. 一方, 小胞体ストレスマーカータンパク質の発現量の変化には, PA と OA で違いが見られた. PA と OA がそれぞれ異なる機序で, 小胞体にストレスを与えている可能性が示唆された.

4. まとめと今後の課題

CEPIA を遺伝子導入した INS-1 細胞では, 小胞体内の高い Ca^{2+} 濃度範囲で, 刺激に応答して減少する Ca^{2+} 濃度を捉えることができた. 1 分ごとまたは 5 秒ごとの観察において, 小胞体 Ca^{2+} 濃度が細かく振幅している様子を捉えることもでき CEPIA を用いることによって小胞体内の Ca^{2+} の微細な出入りを観られることがわかった.

遊離脂肪酸がインスリン分泌に与える影響を脂肪酸毒性と呼び, 小胞体ストレスを介してインスリン分泌に影響を与えている可能性が示唆されてきたが, 実際に小胞体 Ca^{2+} 濃度の経時変化をとらえた研究はこれまでなかった. 今回の CEPIA を用いた系によって, 遊離脂肪酸が小胞体 Ca^{2+} の放出, それに伴うインスリン分泌に影響を与えることを観察することができた. 細胞内では, 小胞体以外にもミトコンドリアやゴルジ体がカルシウム貯蔵庫として機能していると言われている. これらの小器官内の Ca^{2+} 濃度を観察する系を立ち上げることも今後の課題である.

主要参考文献

- [1] 稲垣 暢也: 日本人型インスリン分泌不全を考える, 日本内科学会雑誌 105 巻 3 号, 396-401 (2016)
- [2] Elida Lai *et al.* Differential activation of ER stress and apoptosis in response to chronically elevated free fatty acids in pancreatic β -cells, *Am J Physiol Endocrinol Metab* 294: 540-550 (2008)
- [3] Junji Suzuki *et al.*, Imaging intraorganellar Ca^{2+} at subcellular resolution using CEPIA, *Nature Communications*, 5:4153 (2014)
- [4] 飯野 正光 他: 細胞内の高濃度カルシウムイオンをとらえるセンサーを開発—ミトコンドリア・小胞体内カルシウムシグナルの可視化—, 東京大学 研究報告会概要 (2014)

LC-MS/MSによる食品中のD-及びL-アミノ酸の分析

Analysis of D-and L-amino acids in foods by LC-MS/MS

鈴木 優理子

Yuriko Suzuki

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修

キーワード：D-アミノ酸，LC-MS，光学異性体分析

Key words：D-amino acid, LC-MS, Optical isomer analysis

1. 目的

近年，黒酢，醤油等の発酵食品中に D-アミノ酸が比較的高濃度で含まれていることが明らかとなり，D-アミノ酸生成機構や D-アミノ酸の新たな機能解明に大きな関心が寄せられている．D-アミノ酸の分析法として最も多用されている手法は，蛍光誘導体化及びキラル誘導体化後に ODS カラムを用いた HPLC で分離定量する方法である．しかし，本分析法は 2 回の誘導体化を必要とし，操作が煩雑である．そこで本研究では，分離カラムにキラルカラムを用い，検出に質量分析計を採用した LC-MS/MS による D-及び L-アミノ酸分析法の試みた．

黒酢やヨーグルトの発酵食品では，多量に含まれる食品由来成分を除去し，分析目的成分である D-アミノ酸，L-アミノ酸を濃縮精製することが求められる．そこで，一般に濃縮精製法として汎用されている固相抽出法を用いた前処理法の開発を検討した．

構築した分析法を用いて，市販食品への応用として，アミノ酸飲料，黒酢，醤油，乳及びヨーグルト等の発酵食品のアミノ酸量の測定を行う．また，ヨーグルト中に含まれる乳酸菌や乳酸菌の腸内での働き等の研究がいくつも報告されているが，ヨーグルト培養時間におけるアミノ酸量及び乳酸菌数の変化に関する研究はほとんどされていない．そこで，乳にヨーグルトを加えてヨーグルトを作成し，培養時間によるアミノ酸量，乳酸菌数，pH，酸度，糖度等の変化について検討することを目的とした．

2. 方法

試料：黒酢，醤油，乳及びヨーグルト等の発酵食品及びアミノ酸を強化し清涼飲料水を用いた．

試験溶液の調製：醤油，黒酢は，メタノールで除タンパク後，遠心分離し，その上清を 10～10000 倍希釈して試験溶液とした．乳及びヨーグルトは，メタノールで振とう抽出後，遠心分離し，その上清を 2mL 分取し，水 3mL を加えた後に，Oasis HLB (150mg) カートリッジに負荷し，試験溶液を調製した．

LC-MS/MS 測定条件：分離カラムに CHIROBIOTIC T を (25 cm x 2mm I.D.) 用い，移動相には 0.05%酢酸-エタノール混液を用いた．MS 測定条件は，ESI (+) 及び ESI (-) を併用し，MRM モードを採用した．

3. 結果と考察

今回，分離カラムにキラルカラム CHIROBIOTIC T を用い，検出に質量分析計を採用した LC-MS/MS による D-及び L-アミノ酸の高感度且つ選択性に優れた分析法を構築した．本 LC-MS/MS 測定条件を用いることにより，ほとんどの遊離アミノ酸を，L-体と D-体に分離することが可能であった．試験溶液の調製は，食品中に含まれる幅広い化合物の精製法として汎用されている Oasis HLB カートリッジを用いた固相抽出法を構築した．

本試験溶液調製法の妥当性評価するため，添加回収実験を行った．アミノ酸を 5ppm の濃度で添加し，添加回収実験を行った結果，ヨーグルト，牛乳いずれも回収率はおおむね 70%以上，標準偏差は 10%前後でありおおむね良好な結果が得られた．表 1 には L-体の添加回収率を示したが，D-体

も同様の結果が得られた。

表1. 添加回収率

Compound	Yogurt		Milk	
	Added (μ g/g)	Recovery(%)	Added (μ g/g)	Recovery(%)
Glycine		101.4 $\pm$ 21.3		97.9 $\pm$ 5.3
L-Alanine		68.6 $\pm$ 8.8		73.0 $\pm$ 9.2
L-Serine		77.2 $\pm$ 3.3		81.0 $\pm$ 10.3
L-Proline		90.4 $\pm$ 15.9		72.3 $\pm$ 9.3
L-Valine		105.4 $\pm$ 10.8		79.5 $\pm$ 11.3
L-Threonine		104.6 $\pm$ 12.7		81.1 $\pm$ 12.4
L-Cysteine		101.4 $\pm$ 21.3		101.4 $\pm$ 21.3
L-Leucine*		108.14 $\pm$ 12.0		91.6 $\pm$ 16.9
L-Isoleucine*				
L-Asparagine	5	64.5 $\pm$ 7.2	5	87.2 $\pm$ 9.0
L-Aspartic acid		87.2 $\pm$ 6.3		74.8 $\pm$ 7.0
L-Glutamine		122.7 $\pm$ 20.8		83.1 $\pm$ 18.9
L-Lysine		78.9 $\pm$ 8.4		73.4 $\pm$ 8.2
L-Glutamic acid		84.0 $\pm$ 8.9		98.0 $\pm$ 8.1
L-Methionine		101.1 $\pm$ 8.9		77.2 $\pm$ 8.1
L-Histidine		90.4 $\pm$ 12.3		78.9 $\pm$ 11.3
L-Phenylalanine		101.6 $\pm$ 9.8		77.6 $\pm$ 5.9
L-Arginine		65.7 $\pm$ 7.6		75.8 $\pm$ 6.7
L-Tyrosine		98.4 $\pm$ 6.7		80.3 $\pm$ 7.8
L-Tryptophan		94.5 $\pm$ 8.0		78.1 $\pm$ 8.1

構築した試験溶液調製法を用いて市販されている黒酢や醤油、ヨーグルト等の発酵食品を分析した結果、検出されたアミノ酸の多くは L-体であったが、一部の黒酢からは比較的高濃度の D-アラニン等の D-アミノ酸が検出された。健康飲料として数多くの黒酢が市販されているが、今回 7 検体の黒酢製品を分析した結果、製品に表示されている遊離アミノ酸量と実際の分析値を比較した結果、分析値がかなり低い製品もみられた。醤油では、大豆原料（丸大豆・脱脂加工）の相違による遊離アミノ酸量、D-及び L-アミノ酸組成等に相違が見られるか検討した。原料に丸大豆を使用している醤油の方が遊離アミノ酸量が多く検出された。丸大豆を用いた醤油の方が熟成・発酵に時間がかかることから、アミノ酸が多く検出されたと考えた。また、醤油から検出されたアミノ酸は、全て L-アミノ酸であり、D-アミノ酸は、検出されなかった。

次に、牛乳にヨーグルト（乳酸菌）を加え、43℃で 24 時間発酵させ、発酵時間による遊離アミノ酸量及び乳酸菌数の変化を調べた。多くの遊離アミノ酸は、発酵開始時に比べ、発酵 1～3 時間で減少が見られたが、5 時間以降は、発酵時間と共にアミノ酸量は増加し、D-アラニン等の一部の D-アミノ酸の生成が認められた。同様に、発酵開始時に比べ、発酵 1 時間で乳酸菌数は減少傾向が見られたが、3 時間以降は、発酵時間と共に乳酸菌数は、指数関数的に増加傾向が認められた。発酵開始時から、暫くは誘導期（発酵 1～3 時間）であり、ア

ミノ酸量の減少が見られたが、発酵が進むにつれ、乳酸菌数及び遊離アミノ酸に増加が見られた。また、発酵により乳酸菌が増加することで、乳中のタンパク質が代謝され、アミノ酸量の増加につながったと考えられた。

ヨーグルト作成時の pH、糖度、酸度の変化では、牛乳にヨーグルトを添加することで、乳酸菌の生成するラクターゼ酵素が牛乳に含まれる乳糖（ラクトース）が代謝され、乳酸を生成する。発酵が進み、乳酸菌の増加により、乳酸量が増加し、牛乳の当初の pH である 6.5 付近から 4.5 付近まで下がることで、酸度が徐々に高くなると考えられた。

4. まとめと今後の課題

分離カラムにキラルカラム CHIROBIOTIC T を用いた、LC-MS/MS による高感度且つ選択性に優れた分析法を構築した。

黒酢や醤油はメタノールで除タンパクすることで、マトリックスの影響をほとんど受けることなく分析することができた。また、乳やヨーグルトはメタノールで除タンパク・抽出後、Oasis HLB カートリッジを用いることで、マトリックスの影響をほとんど受けることなく分析できた。

構築した分析法を用いることで、簡便で高感度にアミノ酸を分析することが可能であったことから、黒酢や醤油、ヨーグルト等の発酵食品の品質評価に応用することが期待できる。

なお、本分析法では、L-イソロイシンと L-ロイシン、D-L-アスパラギン酸を分離・定量することが困難であることから、更なる研究が必要だと考えられる。

主要参考文献

- [1] 堀江 正一, 石井里枝, 斎藤貢一, 伊藤里恵, 岩崎雄介 他
光学異性体を有する食品添加物の安全性評価のための基礎研究
日本食品化学研究振興財団 第 14 回研究成果報告書 130-134 (2008)
- [2] 堀江 正一, 石井里枝, 小林 晴美, 斎藤貢一, 伊藤里恵 他
光学異性体を有する食品添加物の安全性評価のための基礎研究
日本食品化学研究振興財団 第 15 回研究成果報告書 174-178 (2009)

若年女性の健康に影響を及ぼす身体組成と糖代謝障害に関する研究

A study on body composition and impaired glucose metabolism
affecting health status of young female

中澤 沙希
Saki Nakazawa

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修

キーワード：若年女性，身体組成，糖代謝障害

Key words : Young female, Body composition, Impaired glucose metabolism

1. 目的

近年，若年期の無理なダイエットや身体活動量の減少といった好ましくない生活習慣に伴い，若年女性における骨強度の低下，筋肉量の減少等の体構成成分の問題点が指摘されている．高齢者においても骨粗鬆症やサルコペニアが高齢者の寝たきりの要因の一つとして注目されているが，若年期からリスクを抱えた世代がこのまま高齢期を迎えると，現状での高齢者よりもさらに深刻な問題となることが予想される．生活習慣の中で，近年わが国では運動不足が問題視されている．平成 28 年国民健康・栄養調査によると，運動習慣のある女性の割合は全体の 27.4%であり，20 代女性においては 1 割にも満たない．骨強度の維持には若年期以前の適切な運動習慣が必要であることは多くの研究で報告されている．また，運動不足が続くと骨格筋量の低下にもつながるため，成長期における運動は重要である．よって，若年女性にとって，将来の骨粗鬆症やサルコペニアの予防のためには，適切な運動習慣の保持が必須とも言える．

一方で，国民病でもある糖尿病は，世界的にも患者数は増え続けており，国際糖尿病連合

(International Diabetes Federation ; IDF) の発表によると，全世界の糖尿病人口は 4 億 2,500 万人にのぼり，2045 年には 6 億 9,300 万人にまで達すると予想されている．また，近年では糖尿病の発症年齢の若年化が進んでいる．そのため，若年者における耐糖能の評価，糖尿病予備群での耐糖能障害の段階からの生活習慣改善は急務といえる．また，食生活の多様化や活動量の減少により若年者においても食後高血糖状態を示す者が認められる

ことも明らかになってきているが，わが国における若年者の血糖プロファイルの報告自体が極めて少ないのが現状である．

ここまで述べたように，若年女性の健康問題は複雑化しており，解決すべき課題も多い．また，若年女性は妊娠，出産，育児を控えているため，自身の身体を健康に保つことは極めて重要であり，また産まれてくる次世代の担い手の健康にも確実に影響を及ぼすことから，より早い段階からアプローチすることが必要だと考えられる．そこで，本研究では，若年女性の健康に影響を及ぼす問題点として，身体組成と糖代謝障害に着目し，将来の健康障害予防策の方向性を明らかにすることを目的とした．

2. 方法

第一章では，若年女性 225 名 (20.3±1.0 歳，BMI 20.4±2.1 kg/m²) を対象とし，超音波法による骨強度，インピーダンス法による体組成測定，さらに中学時から現在までの運動歴の有無を質問紙により調査し，各年代の運動歴と体組成との関連を検討した．

第二章では，若年女性 162 名 (20.4±1.2 歳，BMI 20.5±1.9 kg/m²) を対象とし，指尖自己採血による食後 1 時間における血糖値測定，体組成測定，握力測定，質問紙による身体活動量調査 (IPAQ)，糖尿病家族歴の聞き取り調査を実施し，食後の血糖値と各データとの関連を検討した．

第三章では，食後高血糖をより詳細に検討するため，75 g 経口糖負荷試験 (Oral glucose tolerance test : OGTT) を実施した．若年女性 12 名 (21.0±2.2

歳, BMI $20.8 \pm 1.3 \text{ kg/m}^2$) を対象とし, OGTT, 体組成, 筋力測定 (等尺性膝伸展力・等速性脚伸展パワー) を実施し, OGTT から得られた血糖曲線下面積 (Area under the curve : AUC) と各データとの関連を検討した. OGTT は, 指尖自己採血で実施し, 0・30・45・60・120 分での採血とした. 測定項目は, 各測定ポイントでの血糖値・インスリン値と空腹時での HbA1c 値とした.

3. 結果と考察

・第一章

骨強度の測定結果より, 骨粗鬆症検診における要精検レベルと要指導レベルの判定基準に該当した者を合わせると 20%, 骨格筋量の測定結果より, アジア人高齢女性におけるサルコペニアのカットオフ値 ($\text{SMI} = 5.7 \text{ kg/m}^2$) に満たない者が 23%おり, 本研究の対象者において低骨強度・低骨格筋量が確認された. 骨強度と運動歴の関係では, 高校時の運動歴が「なし」の方が「あり」に比べて骨強度が有意に低かった. また, 骨格筋量と運動歴の関係では, 中学時・高校時の運動歴共に「なし」の方が「あり」に比べて骨格筋量が有意に低かった. したがって, 骨強度・骨格筋量の低値には, 成長期からの運動歴が関連している可能性が示唆された.

・第二章

食後 1 時間における血糖値が高値 ($\geq 155 \text{ mg/dl}$) を示した者は全体の 35%に達した. また, 食後 1 時間血糖値と体組成・握力・身体活動量との間に有意な相関は認められず, 糖尿病家族歴の有無による食後 1 時間血糖値にも差が認められなかった. よって, 糖代謝障害を有する若年女性の存在は認められたものの, その要因までを明らかにすることは出来なかった.

・第三章

12 名の OGTT 時の血糖値推移をみたところ, 糖負荷後に高血糖となる者の多くは, 血糖値がスパイク状に上昇して下がるのではなく, 糖負荷後の血糖値ピークから糖負荷 2 時間後にかけて徐々に下がるようなパターンであった. そこで, OGTT の際の血糖 AUC と OGTT から求めた各指標との関係について検討した. OGTT の結果からインスリン分泌・抵抗性関連指標を算出したところ, 骨格筋のインスリン抵抗性のみ血糖 AUC との相関傾向が認められた. 筋力と血糖 AUC の間には関連

が認められなかった. よって, OGTT の結果においても, 若年女性における糖代謝障害の存在が確認された. また, その要因として骨格筋のインスリン抵抗性が関連していることが示唆されたが, 筋力との関連は認められなかった. 今後は骨格筋の質との関係について, より詳細な検討を加える必要があると考えられる.

4. まとめと今後の課題

本研究の結果より, 若年女性において骨強度の低下・骨格筋量の減少・糖代謝障害が認められ, 骨粗鬆症, サルコペニア, 糖尿病発症のリスクを有する者の存在が確認された. 骨強度の低下・骨格筋量の減少には, 中学・高校時の運動歴が関連している可能性が示唆された. また, 糖代謝障害に関しては, その要因として骨格筋のインスリン抵抗性が寄与している可能性が考えられたが, そのメカニズムに関しては, 今後より詳細な検討が必要である.

第一章における検討では, 運動歴の有無についての検討しか行っていない. しかし, 運動を行うことによる骨強度への影響は, スポーツの種目別に異なるという報告もあるため, 今後は運動歴の有無だけでなく, 「強度・1 回当たりの時間・1 週間あたりの頻度」などの詳細な検討も必要であると思われる.

第三章における検討では, 対象者が 12 名と少数であり, 個人間で差を認めたことから, 個人差が確認された. 個人毎に結果を評価することも大切であるが, 若年女性全体での傾向をより正確に確認するためには, 今後, 対象人数を増やして検討を行う必要があると考えられる. また, 本章では, 若年女性の糖代謝障害の要因として, 骨格筋のインスリン抵抗性が寄与している可能性が示唆された. 近年, 骨格筋内脂肪の蓄積とインスリン抵抗性との間に相関がみられるという報告もあることから, 骨格筋の質 (骨格筋内脂肪や骨格筋代謝機能など) の低下が骨格筋インスリン抵抗性に寄与していることも考えられる. 今回の研究では, 骨格筋インスリン抵抗性の機序までは明らかにすることができなかったため, 今後は, 骨格筋の質に着目し, 糖代謝障害との関連を行うことが課題であると考えられる.

暑熱環境下における浴衣の着装

Wear of the Yukata which can be put under the Summer Heat Environment

植田 桜

Sakura Ueta

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 生活環境学専修

キーワード：浴衣，着用実験

Key words：Yukata, Wearing test

1. 研究背景・目的

日本の伝統衣装である和服は、世代を超えて現代も受け継がれている。近年、日本人が和服を着装する機会は、慶事や弔事の場面であり、日常的に着装することは少ない。一方で、日本の夏のイベントである祭りや花火大会での浴衣の着装は、年々、世代を超えて着装する人が多くなってきた。これからも一層多くの日本人が伝統衣装である和服を受け継いでいくためには、安価で購入でき、一人でも簡単に着装することが可能となる浴衣を推進していく必要があると考える。

近年日本の夏の気候はととても蒸し暑く、高温多湿である。こういった夏の蒸し暑い中でも浴衣の着装を楽しむためには、涼しく着こなす方法や着心地の良さが必要になると考える。これまでに浴衣のデザインや価格、素材については十分に言及されている一方、浴衣を涼しく着こなす方法については未だ十分な結論が見出されているとはいえない。

そこで本研究では、夏の蒸し暑い中でも浴衣を楽しんでもらうために、浴衣着装の際に衿の抜き方を工夫して、涼しく着こなす方法を衣服最内層の環境条件の比較から、検討することとした。ここでは修士論文の第IV章の内容を述べる。

2. 実験方法

2-1. 被験者

着装実験における被験者は標準体型の健康な女性 6 名 (18~24 歳) を対象とした。これら 6 名の着用者間の体型の平均は、身長 157.50cm (SD3.60)、胸囲 68.83cm (SD4.60)、胸囲 82.33cm (SD5.00)、腰囲 88.33cm (SD 3.80)、体表面積 1.5447m² (SD 0.0957) である。

2-2. 環境条件

環境条件は WBGT-101 (京都電子工業製) で測定し、熱中症を注意すべき温度 25℃~28℃の警戒レベルとした。したがって人工気候室は 30±0.5℃, 70±4.0%RH, 0.01m/s の条件下で着装実験を行った。

2-3. 試験布

試験布は綿 100%の平織り浴衣地を用いた。基本特性は表 1 に示す。

表 1 試験布の基本特性

厚さ (mm)	密度 (本/cm)		目付け (g/m ²)
	たて	よこ	
0.31	26.0	25.4	106.6

2-4. 着衣状態

実験着の着装は、一般的な浴衣の着装を熟知し、背中心、衿合わせ、腰紐の位置など一定の基準を設けた。着装を工夫し、衣服最内環境の温度・湿度に与える影響について検討するため、衣紋の抜き方を以下の①~③の着装方法で条件を設定した。①図 1 のような一般的な着装。衣紋を背中から 5cm 離し、30 度衿を倒した状態。②図 2 のような衣紋を抜かない着装。③図 3 のような着物のように衣紋をこぶし一つ分より多



図 1 一般的な着装 (A)



図 2 衣紋を抜かない着装 (B)

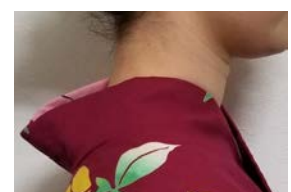


図 3 衣紋を多く抜いた着装 (C)

く抜いた着装. 衣紋を背中から 7cm 離し, 50 度衿を倒した状態.

以下一般的な着装方法を A, 衣紋を抜かない着装方法を B, 衣紋をこぶし一つ分よりたくさん衣紋を抜いた着装方法を C と表記する.

2-5. 方法

被験者は食後 1 時間経過後, 標準状態の室内で 150ml の飲用水を摂取, 深部体温, 体重を測定し実験着を着用した. 人工気候室に入室させ, 30 分間椅座の状態であ静を保った. その後, 30 分間歩行を開始した(歩数を 2'500~3'000 歩とし, メトロノームに合わせて歩行). 人工気候室入室から 5 分毎に, サーミスタ温度計で衣服内環境の温度を測定し記録した. 着装の際, 測定点である背-肩胛線肩胛棘直下, 上腹-剣状突起直下, 腕関節 - 上腕関節下部内上髁上約 1cm の 3 点に DISITALTHERMOMETER SATO PC-9400 のサーミスタ温度計を装着した. 以下, 背, 上腹, 腕関節と記載する. また, 第 1 科学温室度計 TRH-3A 型で歩行前・歩行後に衣服内環境の温度, 湿度の計測を行った. 人工気候室退出後, 1 分以内に帯, 浴衣, 下衣を脱衣し, それぞれの試料を測定し, 汗の量を把握した. 深部体温, 体重(下着 {ブラジャー, パンツ} の状態) の測定も同時に行った.

3. 結果と考察

図 4,5 は衣服内温度の 6 人分の平均データとし, 5 分おきにわたる経時変化を示したものである. 縦軸が温度, 横軸が経過時間とする.

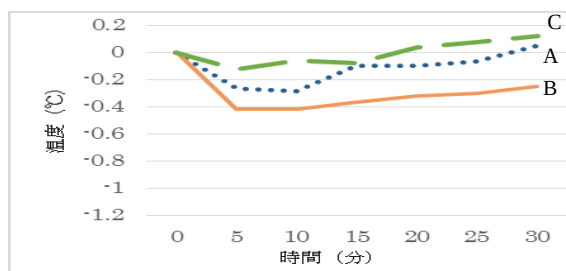


図 4 上腹の温度の経時変化

..... 一般的な着装(A), — 衣紋を抜かない着装(B),
- - 衣紋を多く抜いた着装(C)

図 4 の上腹温度の経時変化の結果では, 歩行開始温度が 3 種類の着装とも低下し一番温度の降下がみられた着装方法は B であった. 次いで A, C と続いた. 開始後すべての温度が低下していたものの, 徐々に衣服内温度は上昇し 30 分後には, 開始のときの温度より A は 0.05°C, C は 0.12°C 上昇した.

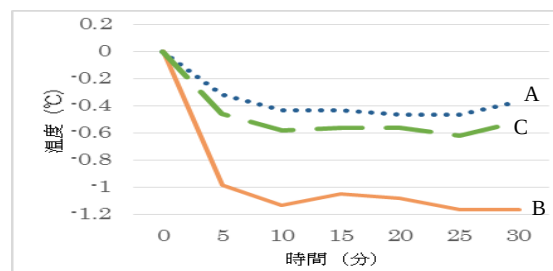


図 5 背の温度の経時変化

..... 一般的な着装(A), — 衣紋を抜かない着装(B),
- - 衣紋を多く抜いた着装(C)

図 5 の背温度の経時変化では, 歩行開始後 5 分で 3 種類とも温度が低下し, 一番温度が低下したものは, B であった. 次いで低下したのが C, A の順となった. 30 分経過後, C は -0.52°C, A は -0.37°C と 0.15°C とそこまで差はみられなかった. しかし A -0.37°C と B -1.17°C を比較してみると, 0.7°C と 1.0°C 近くの差がみられた. 一番風が入りにくく, 気流が生まれにくい B が低下した要因は上腹の温度と同じく, 暑熱環境により体温調節機能の放熱運動が始まり, 放熱が一番大きかったと考える.

実験前後における試料の重さの測定では, 1 番浴衣の重さが増加したものは, B の 10.333g, 次いで C の 7.400g, A の 3.500g であった. また, 下着も同様に一番重かったのが B の 1.500g であった. 次いで C の 1.000g, A の 0.833g であった. 図 4 の上腹や図 5 の背の温度が一番下がったのも B であったため, 放熱で汗をかき, 汗が布に付着したことによって体を冷やし衣服最内温度が低下したと考える.

4. まとめと今後の課題

一般的に夏の衣服は開放口を作るほうが良いといわれているが, 今回の結果では一番衣紋を開放していない B の温度が低下していた. あえて衣紋を抜かないことで汗を多くかき, 蒸れから濡れの現象が起きて, 体を冷やすことにより衣服内温度が低下した. しかしながら汗のかき方など人によって差が大きい. 今後もっと被験者の増加や時間帯, 水分摂取量など統一することを追求していかなければならない.

主要参考文献

[1] 一般社団法人衣料検査協会 ; 「トピックス調査報告書」 2016.9.23 発行

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成 DB2903 を受けたものである.

裁縫教科書に見られる着物の変遷

Transition of Kimono the way Seen by Sewing Textbooks

加藤 花苗

Kanae Kato

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 生活環境学専修

キーワード：裁縫教科書，着物，裁ち方

Key words : Sewing Textbook, Kimono, Cutting

1. 目的

平安時代末期以降，庶民に筒袖(小袖)の着物が広まり，武家社会を経て小袖の着物を普段着として日常的に着用し生活を送っていたことが多くの文献から解っている．その中で，明治9年の裁縫教科書『裁縫手引艸乾』^[1]に「長着」という言葉が記載されており，その着物に関する裁断図面が記載されていた．「長着」とは，半纏や羽織のような丈の短いものに対し，身丈が足首まである丈の長い着物を指している．

しかし，日本は近代化を図るために明治初期以降アメリカやヨーロッパの国々の制度や技術をはじめ西洋の物を積極的に取り入れようと試み，制度や習慣が大きく変化した．西洋のものが取り入れられ，「和装化」から「洋装化」へと変化を遂げる．「洋装化」に伴い，日本社会で着装する衣服として洋服が一般的となり，現在では着物を普段着として着用し生活を送る日本人は少ない．着物を着用する機会の減少により，着物を仕立てる機会も少なくなり着物を縫製出来る職人の減少に繋がっていると考える．これにより，着物離れが加速し着物の縫製に関する職人や指導者の不足に陥り，現在では着物業界の衰退が問題視されている．

着物は長い歴史の中で受け継がれ日本の伝統文化の一つとされ，日本が誇る伝統ある着物の魅力をより多くの人々へ広め，その伝統を受け継いでいくことが大切であると考え．そのためには，着物を知る上で重要となる「裁縫教科書」についての理解を図り，裁縫の指導内容や裁縫を学ぶ上で重要となる要点を明らかにし，着物を学ぶことの重要性について考察することが必要不可欠である．

2. 方法

本研究では，本学の図書館や国立国会図書館所蔵の明治時代に発行された裁縫教科書を調査し，ここに記載されている内容を読み解き，記載の特徴や重要となる観点について論じた．また，裁縫教科書に記載されている大裁女物長着のなかの単衣長着を取り上げ，布の裁断に関する記載内容を読解し，裁断方法の変化や重要となる観点について結果・考察を行った．

最後に研究結果及び考察についてまとめ，裁縫教科書の分類を行い，今後の展望や課題について論じた．

3. 結果と考察

裁縫教科書の記載内容を読み取った結果，裁縫教科書の冒頭に女性にとっての職務や女性としての心得等が詳細に記載されていた．また，縫製の出来ない女性は恥と考えられていた程，当時は裁縫を学ぶことを重要視していた時代であった．そのため，明治時代と現代では裁縫を学ぶ姿勢に大きな差があると考え．明治時代の人々は裁縫を学ぶことで女性として評価され，職務としても考えられていたからこそ何枚も着物を仕立て，子供や孫へと裁縫を指導していたと考える．しかし，現代人は日常的に着用する衣服として洋服を着用し，着物に触れる機会が減少したことで着物への興味や関心が希薄化している．

また，明治時代の教科書には縫製に関する説明文の記載がない部分(図1)については，口述指導によって裁ち方や縫い方について指導がなされていたと考える．

当時は一斉授業ではなく一人一人手にとって指導を行っていた．また，教員も1～2人程度で指導

を行っており、当時は現在のような ICT 教育やメディア関係の機器類もなかった時代であり、細かい作業など全生徒に指導することを考えると、教員の苦労や指導方法の大変さが伺えた。

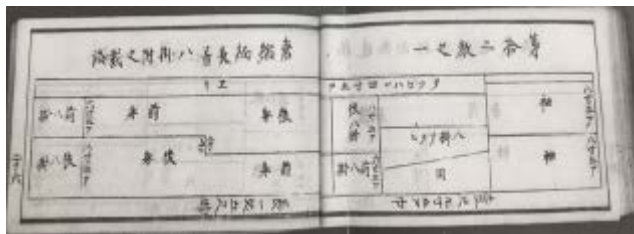


図 1 『裁縫手引艸乾』^[1]の記載内容

明治 11 年の教科書では、学年によって縫製技術の難易度を上げていたことが解った。例えば、10 歳～13 歳で白無垢や振袖、袴等の着物を縫製出来る構成になっており、当時の裁縫技術のレベルが高かったことが解る。現在でいえば、家政科のある高校や被服学科のある大学で学ぶ内容である。

明治 32 年以降から教科書の 1 ページを上段、下段に分けて、二部形式の教科書が存在していたことが解った。着物の仕立て方だけでなく、日常生活の中で使用する布団や小物類、食事に関する内容や客人の心得等について記載されていた。また、染色に関する内容や染み抜き等が記載されるようになった。以前よりも記載内容が多くなり衣服以外の分野について記載されるようになった。上段に食事に関する内容やマナーについて記載し、下段には着物の仕立て方等が記載されていることで、1 冊の教科書で様々な分野を学ぶことが出来るようになっていた。

女物単衣長着の裁断では、4 種類の裁ち方が使用されており、棒衤裁ち、鉤衤裁ち、柳衤裁ち、広幅裁ちである。こうした裁ち方を用いて、布を有効利用する裁ち方が一般的に行われていたことが解る。

裁断図面を見ると、裁断や縫製に関する説明文等の記載がされておらず裁断図面や裁断寸法のみ記載されていた。また、裁断する際に重要となる印付けに関する記載も一切記載されていなかった。当時の女性は、何度も何度も着物の縫製を行っていたため、印付けを行わずに仕立てられる程の熟練者としての技術と勘を有していたことが解る。

こうした結果から現在の人々が着物を縫製出来ない理由として、着物の裁縫の経験が少ないことや着物と接する機会が少ないからであると考えられる。

着物を一人で裁縫する技術を修得するためには、一度や二度仕立てただけでは困難に近いと考える。そのため、裁縫を行う時間を増加させ、時間をかけて何枚も何枚も着物を仕立てることが必要である。これにより、明治時代の女性のように勘で着物を仕立てることが出来るようになる。

裁縫を学ぶことで、人と触れ合う機会を増加させることが出来る。日本の着物は海外からも評価が高く、着物の知識や技術を知っていることで日本の文化を伝えることができ、様々な人と繋がる事が出来る。上記で述べたように着物の縫製は困難であるため、縫製が出来るようになると達成感や楽しさを感じることが出来る。また、縫製工程が解るようになると他の着物にも挑戦してみようという意欲が湧き、もっと知識や技術を極めたいと感じる。回数を重ねることで、運針も上達し綺麗に早く縫製することが出来るようになる。また、寸法を計測しなくても自己の勘で出来上がりの位置を把握することができ、印付けが解らなくなっても縫製することが出来る。

4. まとめと今後の課題

今後の取り組みとして、多くの人々が着物に触れる機会を作り、興味・関心を引き出すための取り組みが必要であると考えられる。

そこで、夏季の長期休暇の時期を活用し家庭科の授業の一環として短期間の集中講座を設けることとする。和裁士の方や地域の方、家族の方に協力していただき、和裁士の方を中心に着物の縫製方法について指導を行う。

また、生徒だけでなく教員も免許更新講習の際に着物に関する知識や技術が学べるような講義を取り入れる。学んだことを授業に活用出来るように取り組む必要がある。

こうした取り組みを行うことで、着物の魅力や着物を学ぶことの重要性について理解することが出来る。また、着物に触れる機会が増えることで、今後の和装教育の取り組みに興味や関心を持つ人が現れると考える。

主要参考文献・引用文献

- [1]田淵信頼；『裁縫手引艸乾』；吉岡宇三郎(1876)
- [2]西郷葆；『女童 裁縫教草 初編』；松田氏(1875)
- [3]上田正庸；『女学裁縫幼補』；江藤喜兵衛(1877)

付記

本研究は大妻女子大学人間文化研究所の研究助成 DB2908 を受けたものである。

保育施設選択に見える保護者の子育て観

View of child-rearing observed in childcare facilities selection

関 容子

Yoko Seki

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 児童発達臨床学専修

キーワード：保育施設，保育施設選択，保護者，子育て観

Key words : childcare facilities, childcare facilities selection, parents & guardians, view of child-rearing

1. 目的

「少子化」が社会問題になっているにも関わらず、社会に出て働く女性の増加に伴い、保育施設に入所できないという問題がおきている。子どもが「待機児童」とならないよう、保護者が保育施設に入るために行う行動を指す「保活」という言葉が使われるようになった。小さいうちは家で子どもと一緒に過ごしたい、という人がいる一方、0～2歳児の低年齢児からの入所希望が増えている。家での子育てを選択する時、我が子を保育施設に託すとき、保護者はどのような願いをもつのか。親になって間もない保護者が、子どもといつまで家庭で過ごすか、いつからどのような施設に入れるか、という大きな判断を下す背景には、子育てに対するどのような思いや考えが働いているのか。子どもの社会生活のスタートとなる生活の場を、保護者はどのように選んでいくのか。保育施設の入所を考えると、子どもに対する思いや願いが表出しやすいと考える。保育施設選択に関する研究は、おもに 2000 年代にはじまり、2010 年代頃から検証がはじまっている。しかし、それらの研究は選択要因や、関係因子についての量的研究であり、保護者がどのように施設を選択しているのか、そこに子育てに関する考えがどのように反映しているのか、という子育ての当事者視点から見た研究ではない。子育ては、一般論の中でされるものではなく、日々の生活を共にする生身の保護者やそれを取り巻く個別の環境の中で行われるものである。

本研究では、保護者が子どもの保育施設への入所を考えると、どのような子どもに育ってほしいのか、そのためにはどんな施設で、どんな経験をしてほしいと願っているのか。保護者はどのよ

うな思いを巡らし、何を期待し、何にこだわりを感じ施設選択をしているのか、保護者の子どもの育ちに対する願いと保育施設選択との関連から検討することを目的とする。

2. 方法

(1) 選択に関する研究 (研究 1.)

①インタビュー対象者

10 名の研究協力者は、知人やその友人を通して、研究目的を理解し、協力してもらえる保護者を選定した。これから子どもを保育施設に入所させたいと考えている母親 7 名と、現在子どもが保育施設に在園中の母親 3 名の計 10 名にインタビューを依頼した。研究協力者 (以下、協力者とする) の居住地域は関東地区である。

②研究倫理

この研究では、インタビュー内容を IC レコーダーで録音し分析すること。今後、追加インタビューをお願いする可能性があること。インタビューを通して得られた情報は研究目的以外には使用せず、個人が特定できないよう配慮し、不利益を被ることのないよう最大限の配慮をすることを説明し、同意を得た。

③インタビューの時期・場所・所要時間

2016 年 6 月 3 日から 8 月 14 日にかけて実施した。インタビュー場所は、協力者の希望に添って決定し、インタビュー時間は平均 78.6 分であった。

④インタビュー項目

半構造化インタビューを行った。主なインタビュー内容は、家族構成と両親の職内容、入所時期とその理由、施設情報の入手元と入手法、信頼できる情報入手法と役立つ情報。また、その理由、施設選択理由。どんな子どもに育ってほしいか、そのためにどんな経験をさせたいか、幼児期の経

験はどんなところで影響があると思うか、などである。

(2) 子育て観と育ち (追加調査 研究 2.)

研究 1. の選択時に見られた子育て観は、どのように形成されるのか。保護者の被養育経験に着目し追加調査を行った。

① インタビュー対象者

研究 1. の協力者のうち、追加調査の目的を理解し、自身の育ちについて語ってもらえる 6 名の母親を対象に、半構造化インタビューを行った。

倫理要綱に関しては、研究 1. の追加インタビューが必要になったことを説明し、研究参加に同意を得た。

② インタビューの時期・場所・所要時間

2017 年 9 月 8 日から 9 月 25 日にかけて実施した。インタビュー場所は協力者の希望に添って決定し、インタビュー時間は平均 90.3 分であった。

③ インタビュー項目

半構造化インタビューを行った。主なインタビュー内容は、過去における母親の育ち、育った環境、現在の母親としての考えと子育て環境である。

3. 結果と考察

「保活」の実態に関する調査の結果(厚労省 2017. 5.20)では、保護者が情報収集に苦勞し、市町村情報やインターネットを頼りにすることが報告されている。本研究では、協力者それぞれについて、情報入手から入所に至る経緯を流れ図で時系列に示した。その結果、地縁、血縁のない転居先で、ネット情報のみで施設選択する事例が見られた。また、母子手帳配布時の資料から子育て支援につながり、保護者同士の口コミとネット情報を併用する事例も見られた。情報収集法としてネットと回答した保護者も、いつから何を機に、どのように動き出すかは、協力者 10 名のそのときの家庭背景によりそれぞれ異なる。保育施設選択は、先行研究(堤(2014)、丹治(2015)、石黒(2011))にあるように、母親の就業状況やライフコースといった、それぞれの子どもが生活する家庭背景に影響を受けて、決定がなされることが本研究でも示された。しかし、保育施設を選択するとき保護者には、子どもの将来を見据えた願いとともに、幼児期に経験させたい思いや願い、子育て観があることもインタビューで語られた。先行研究では、施設選択に関連が深いものとして、家庭の経済状況や、母親の就労形態、身近なサポートの有無、

利便性や教育内容に関する関心などがあげられているが、各家庭が抱える問題や生活状況は実にさまざまで、選択時に保護者がこだわり、願うこともそれぞれ異なる。保護者はそのときにどうしても外せない事情を優先する結果、そこしか選べやうがない、ということが起きている。しかし、保護者には「ほんとうはこうしたいけれど」という子どもへの思いがあり、施設選択には子育て観が影響している。量的研究結果では、保育所選択者は利便性、幼稚園選択者は教育内容を重視し、教育内容への関心は保護者の教育歴や収入とも関係があることが報告されている。しかし一人ひとりを見て行くと、こうした要因ばかりでないことが理解できる。保護者がどのような教育内容を好み、どのような施設選択をするのかは、保護者が何を大切に考えているのか、という価値観や生活スタイルに影響する。保護者は子どもを育てる過程で、被養育経験をいまの自分の子育てに生かそうとすることが報告されている。(日比野(2013)、田邊ほか(2009))自分が体験したことが、後に未来を担う子どもたちの子育て観に影響するとすれば、いま子育てしている親が子どもにさせる体験は、大変重要な意味をもつ。本研究で保護者の子育て観は、情報入手やよその親子との交流、子育て支援センターの参加、保育士の対応を見ること、第 2 子を妊娠したことなどを機に変えられていくこともインタビューから明らかになった。保育施設選択を機に、保護者はそれまで無自覚に行っていた子育てに関する考えや自身のライフコースも自覚化させる。現状を踏まえて意識的に考え始める機会となる子育て情報は、重要な意味を持つ。子育て支援につながり、保育施設の生活を知り、保護者の子育て観にあった施設選択につながることで、親子にとって喜びの多い経験が積まれることになる。このことから、子育て支援につながる各自治体の取り組みが、広く子育て中の保護者にいきわたることの意味は大きい。子育て支援の充実と、情報の更なる周知徹底が求められる。

主要参考文献

- [1] 堤 孝晃, 2014, 「どのような家族が保育所／幼稚園を利用するのか」, 『実践女子大学人間社会学部部紀要』, 第 10 集, pp.153-173.
- [2] 日比野直子, 2013, 「母親のライフコースにおける子育て一母親の語りによる子育て過程と支援一」, 『金城学院大学論集 人文科学編』, 第 9 巻第 2 号, pp.96-119.

『田舎教師』における「さびしさ」

Loneliness of a “Inakakyoushi”

谷松 満子

Mitsuko Tanimatsu

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 日本文学専修

キーワード：田舎教師，投稿雑誌，立身出世

Key words : Country teacher, Magazine contribute, Mission impossible succeed

1. 目的

田山花袋は、明治42（1909）年10月に、左久良書房より『田舎教師』を刊行した。花袋がこの小説の題材を得たのは、義兄が住職をしている建福寺を訪れ「小林秀三」の真新しい墓標を見た時である。花袋は住職より預かった秀三の日記の中に「志を抱いて田舎に埋れて行く多くの青年達と、事業を成し得ずに亡びて行くさびしい多くの心とを発見した。私は『田舎教師』の中心をつかみ得たやうな気がした」（『東京の三十年』大正6年）と記している。

小林秀三の日記から花袋は、「さびしい多くの心」を発見した。それを裏付けるように本作品には全部で70箇所「さびしさ」が使用され作品の基調音となっている。

小林一郎氏により発見解説された日記は、小学校教師時代の1年分、すなわち明治34（1901）年のみで、それは小説の25章までの時間にあたる。本作品では、ここまでに全体の約6割を占める41例の「さびしさ」が登場する。『定本花袋全集』を参照枠としておくと4頁に1回の割合となる。しかし執筆に当り花袋が参照した日記には5例の「さびしさ」しか記されていない。

従って、花袋は残された「日記」から窺える小林秀三の実像以上に、林清三のかかえる「さびしさ」を全面に押し出し強調している。その、清三の「さびしさ」を探ることを目的とする。

2. 方法

「さびしさ」の実体にせまるために、次に示す3つの章を立てて考察した。

第1章 『田舎教師』における「さびしさ」

第2章 中学生に期待される生きかたと現実との齟齬

第3章 二人の〈田舎教師〉—清三と丑松—

3. 結果と考察

〈第1章 『田舎教師』におけるさびしさ〉

小林秀三の実像以上に「さびしさ」が強調されていることは、前の〈目的〉のところで述べた。それは題材を得てから刊行されるまでの5年近い間に、花袋が主筆する『文章世界』の創刊があり、投稿者の西萩花や友人である国木田独歩の死が含まれているからではないか。

『文章世界』[明治39（1906）年3月創刊]の投稿欄に掲載された西萩花と加藤武雄の「書簡文」には、病の苦しみと遠くて会えない「さびしさ」が綴られていた。林清三（小林秀三）と西萩花の共通点は、病のために希望を遂げることなく田舎で亡くなった青年であったこと、二人とも無名であり、普通の青年であった。花袋は普通の青年、事業を成し得ずに亡びていったさびしい多くの心を書きたかったのだ。

〈第2章 中学生に期待される生きかたと現実との齟齬〉

明治34,5年から37,8年代の中学生に期待される生きかたと、現実との齟齬について検討した。

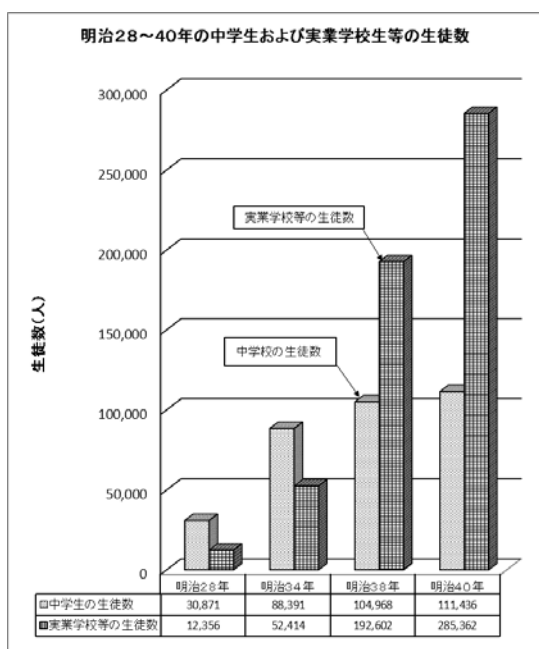
この年代の中学生の実体を知るために、明治19年と32年の「中学校令」を読み解いた。この時期は、日清戦争を経て日露戦争へ向かう前夜、そして日露戦中の時期にあたる。「中学校令」でいえば現在の「道徳」が明治32年に「倫理」から

「修身」に変わり、「国家ニ対スル責務」の内容に「忠君」「愛国」「兵役」がある。当時の社会風潮として「国富の教育」「社会有用の士」であることが中学生に期待されていた。

林清三（小林秀三）が中学校に在籍したのは、明治29年4月より明治34年3月までであり、制度的には明治19（1886）年の「中学校令」による教育を受けたことになる。

明治19年の「中学校令」の変更点は、中学校が高等と尋常に分けられたことである。西尾寛氏の先行研究「中学校令（明治19年）の性格」において、大学が庶民にとって高嶺の花的存在になった原因に、ドイツのギムナジウムの形式を取り入れたことを挙げている。つまり小学校修了者の6.5%しか中学校に進学していない。高等中学校は官立のみ全国を5区にわけて各区に1校ずつ、尋常中学校は各府県1箇所と設置が制限されたことにより、門戸は狭く難しくなったと指摘している。

『学制百年史』[昭和47（1972）年10月文部省]より作成した中学校の生徒数を次に提示する。



中学校に入学したいが、家庭の都合で諦めざるを得ない若者の声が、林清三（小林秀三）と同年輩の中学生に読まれた『中学世界』『青年文壇』[明治31（1898）年博文館]に記されていた。

永井聖剛氏は「初期『中学世界』における〈文学〉の再編成」において、「青年文壇」などの投書

を「国家有用の士であること以外の自己存在のありようを確認しようと試み続けた場であった」と評価している。永井氏の指摘するように『中学世界』に寄せられた投稿には、書くことにより自分をみつめようとする態度が見受けられ、それは功名心ではない。『田舎教師』（28章）にも傍らにあった古い『中学世界』に綴じられた絵葉書に自ら作った歌を書く場面があり、少なくとも目を通していただろう。しかし、清三は永井氏のいう「国家有用の士であること以外の自己存在」に気付けない／気付こうとしない人間なのではないだろうか。

〈第3章 二人の〈田舎教師〉—清三と丑松—〉

林清三のかかえる「さびしさ」の質を検討するうえで、同時代、同年齢の青年教師である島崎藤村『破戒』[明治39（1906）年緑陰叢書]の主人公、瀬川丑松を合わせ鏡としておき考察した。

『破戒』の本文には、34例の「さびしさ」がある。そのうち丑松自身の「さびしさ」を叙述していると思われる5例を検討した。それは敬慕する猪子蓮太郎にも、自分の素性を告白出来ない葛藤から生まれた寂しさであった。従って林清三のさびしさ（寂しさ、淋しさ）とは、根本的に異なっている。二人の共通点は、若くして死亡や退職により小学校教師を辞しているところである。

4. まとめと今後の課題

花袋が、『田舎教師』の清三を通して伝えたかった「さびしさ」は、『東京の三十年』に「万人の狂喜している日に、そうしてさびしく死んで行く青年もあるのだ」とある、志を編みなおすこともできず亡くなる青年の悲劇ではないだろうか。

今後、教師を描いた他の作品と比較したいと考えている。

主要参考文献

- [1]小林一郎編『定本花袋全集』1993年5月、臨川書店
- [2]新装版『島崎藤村全集』1966年12月筑摩書房
- [3]小林一郎『田山花袋『田山花袋』のモデル 日記原文と解説 所収』1963年12月創研社
- [4]『明治以降教育制度発達史第3,4巻』1938年9,11月文部省

黄表紙における天帝像

Image of the TENTEI in KIBYOUSHI

村上 奈帆

Nao Murakami

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 日本文学専修

キーワード：黄表紙，天帝，庶民信仰，心学

Key words：KIBYOUSHI, TENTEI, Folk religion, Shingaku

1. 目的

黄表紙は草双紙の1種であり、子供向けの絵本であった赤本黒本青本に対し、当世風俗を大人向けに描いた戯作である。多くのものが3巻3冊、毎年正月に刊行され、めでたしで終わるのが原則である。

黄表紙には多くの神仏が描かれている。天照大神や七福神、閻魔大王等、現在でも馴染み深いものがほとんどであるが、それらとは別に〈天帝〉と呼ばれる神がとりわけ多く描かれていた。

天帝とは、古代中国の思想における天物造化の神、造物主である。黄表紙の中で天帝は物語を管理する立場として描かれていることが多かった。

神道や仏教に基づく信仰対象だけでなく、なぜ俗信に基づく超越的な神である天帝が好んで黄表紙に描かれたのか。

本研究では、江戸後期の黄表紙に登場する神仏、とりわけ天帝に与えられた役割や行動の傾向を分析し、さらに口絵に描かれた天帝の特徴を考察する。〈異類〉についての研究は近年化物（ばけもの）の研究が盛んであるが、神仏、中でも天帝についての研究は多く見受けられない。そこで、天帝がいつ黄表紙に登場し、どのような形でほかの黄表紙に登場し〈天帝もの〉の趣向が受け継がれていたのか、なぜ多くの黄表紙に登場したのかを明らかにすることで、黄表紙研究に新たな視点を加えることが期待できると考える。

2. 論文構成と研究方法

黄表紙における天帝像を明らかにするため、第一章では調査対象とする寛政から享和期に刊行された黄表紙に登場する神仏、また天帝が初めて黄表紙に描かれた『天慶和句文（てんけいわくもん）』

を取り上げ、当時の民間信仰（庶民信仰）や社会背景について考察した。続いて第二章では、天帝が描かれている黄表紙について確認し、その概要と天帝のストーリー上での役割、心学との関係について考察した。第三章では天帝の描かれ方や、使役しているキャラクターについて分析した。それらの分析結果から、天帝に重ねられたイメージを考察し、なぜ黄表紙に天帝が描かれ続けたのかを考察していく。

3. 結果と考察

〈第一章〉

寛政から享和期に刊行された黄表紙において、神仏が登場するものは48タイトル確認できた。そのうち最も多く黄表紙に登場していたのは〈七福神〉と〈閻魔大王〉であり、それぞれ十七タイトルあった。これは祝言の性質を満たす役割をもつために好まれて描かれている（細谷敦仁『草双紙の七福神』『黒本・青本の研究と用語索引』小池正胤 叢の会 平成4年）

その他の神仏は多くが登場の人物達と共に行動し問題を起こす等、〈起承転結〉の〈承〉〈転〉で中心的に描かれている。

黄表紙に初めて天帝が描かれたのは天明4年に刊行された山東京伝作『天慶和句文（てんけいわくもん）』である。刊行された当時江戸の人々の間で天文的関心が高まっており、その時流を組み込み天上界の騒動を擬人化して描いたもので、この黄表紙に描かれた天帝が、天明6年に刊行された朋誠堂喜三二作『天道大福帳（てんとうたいふくちやう）』へ影響を与え、後続の黄表紙に〈天帝もの〉と呼ばれる趣向が生み出された。

〈第二章〉

『天慶和句文』から始まった〈天帝もの〉と呼ばれる趣向を取り入れた黄表紙は 21 タイトル確認できた（表①参照）。

それらの本文・口絵を分析すると、〈心学〉を題材に扱った黄表紙に天帝がとりわけ多く描かれていることがわかった。

本来〈茶化し〉〈穿ち〉を主とする黄表紙であるが、寛政の改革による心学の流行を取り入れた結果、教訓的なストーリー展開に発展した。

上記 21 タイトルの黄表紙において、他の神仏たちのような行動をとっている天帝は確認できず、物語を管理する立場として描かれていることが確認できた。

表①

山東京伝『天慶和句文』天明四年
朋誠堂喜三『新建立忠臣蔵 天道大福帳』天明六年
山東京伝『仙伝 延寿反魂談』寛政元年
山東京伝『張かへし 行儀有良礼』寛政二年
山東京伝『大極上請合売 心学早染草』寛政二年
山東京伝『世上洒落見絵図』寛政三年
山東京伝『堪忍袋緒 善玉』寛政五年
山東京伝『のしの書初若井の水引 先開梅赤本』寛政五年
式亭三馬『天道浮世出星操』寛政六年
樹下石上『旨趣向棚牡丹餅』寛政六年
唐来参和『善悪邪正大勘定』寛政七年
曲亭馬琴『昔怪談諷教訓 心学晦荘子』寛政七年
十返舎一九『雷門再興 御膳浅草法』寛政八年
曲亭馬琴『加古川本蔵綱目』寛政九年
十返舎一九『雨宮風宮 出儘略縁起』寛政十年
曲亭馬琴『風見草婦女節用』寛政十一年
曲亭馬琴『彼岸桜勝花談義』寛政十一年
山東京伝『仮名手本胸之鏡』寛政十一年
沈酔中美明『通寓言愚妄作 金世界揃能艶』寛政十二年
白銀台一丸『金降豊歳貢』享和二年
山東京伝『延命長尺 御詠染長寿小紋』享和二年

〈第三章〉

黄表紙に描かれた天帝には、二種類の描かれ方があった。人間の姿で頭の後ろに後光が差しているタイプと、頭部が日輪になっているタイプである。それぞれを〈人間型〉と〈日輪型〉として分類すると、〈人間型〉の天帝が 9 タイトル、〈日輪型〉の天帝が 11 タイトルあった。

この他にも天帝の描かれ方には装束の違いがあった。日輪型の天帝は平安装束の束帯によく似た

装束を着ていることが多く、その形は『天道大福帳』の天帝の姿から変わらなかった。対して人間型の天帝であるが、日輪型と同じく束帯風の装束と、羽織と着物姿、また朝服や鎧を身に付けた姿のものも確認できた。これらの装束には、白の無地のものと、それに太陽と雲の柄が真中に一つ入っているものがある。また朝服を着た人間型の天帝の装束や周囲には、3つの星を山型に並べた星座が描かれていた。これらの描写から、庚申講や七夕に関係する天帝、太陽のイメージが重ねられていることが考えられる。

また天帝は全 21 タイトル中 9 タイトルで手下を使役していた。そのうち鳥と星が最も多く使役されていた。鳥は八咫鳥等で江戸では太陽（神）の化身や御使として知られており、装束と同様に太陽のイメージ、また星は天上界の支配者としての北斗七星のイメージが重ねられていると考える。

4. まとめ

黄表紙において、天文的内容のものから心学を題材にした黄表紙へ内容が変化していく過程で、物語を支配する立場として天帝が好まれて描かれた。その天帝には庚申講や七夕に関係するものや、また太陽・北斗七星としての天帝のイメージが重ねられていることが考えられる。

なぜ黄表紙に天帝が描かれたのか。それは、黄表紙は絵入り本であり、物事を視覚化することが大きな特徴の 1 つである。そのため、視覚化され、それに心学の流行が合わさり、その後長く続く〈心学もの〉の黄表紙に、天帝という物語を管理する役割を持ったキャラクターが描き続けられたからであると言える。

今後の展望としては、今回詳しく分析できなかった天帝以外の神仏の描かれ方や役割を詳細に調査し分析することで、さらに黄表紙と〈異類〉の関係が明らかできると考えられる。

主要参考文献

- [1] 小池正胤[等] 編『江戸の戯作絵本』(1) (現代教養文庫 社会思想社 昭和 55 年)
- [2] 棚橋正博『黄表紙総覧』(青裳堂書店 昭和 61 年～63 年 棚橋正博)

平安貴族女性の裳唐衣装束

Mo Karaginu costume of the Heian aristocracy lady

山崎 萌子

Moeko Yamazaki

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 日本文学専修

キーワード：女性装束，禁色，織物，綾，紋

Key words : costume for woman, restrictions on the use of colors, fabric, twill, design

1. 目的

平安貴族女性の正装，裳唐衣装束には禁色という制度があった。平安末期の故実書『雅亮装束抄』[1]では、「青色，赤色の織物の唐衣，地摺りの裳」が禁色とされており，定説となっている。禁色の着用が許されることを「色聴（ゆ）るさる」と言う。

しかし、『紫式部日記』[2]（以下、『日記』とする）には，この規定にそぐわない衣装の様子が記録される。たとえば，寛弘五（一〇〇八）年十月十六日の土御門行幸場面である。

御簾の中を見渡せば，色聴るされたる人々は，例の青色・赤色の唐衣に地摺りの裳，表着はおしわたして蘇芳の織物なり。（中略）綾聴るされぬは，例のおとなおとなしきは，無紋の青色もしくは蘇芳など，みな五重にて，かさねどもはみな綾なり。（中略）桂は菊の三重五重にて，織物はせず。若き人は，菊の五重の唐衣を心々にしたり。（二七五頁）

「例の青色・赤色の唐衣」（禁色）着用の〈色聴されたる女房〉と，「無紋の青色」を着用する〈綾聴るされぬ年配女房〉が登場している。本来ならば禁色とされる青色の唐衣を，〈綾ゆるされぬ年配女房〉は，その生地を「無紋」にすることで着用している。この「綾聴るされぬ」とされるのはどのような女房なのか，また，聴るされていない「綾」とは何なのかは，これまで明確にされていなかった。

2. 方法

『日記』と同場面を記録するのが『栄花物語』「はつはな」巻である。しかし，衣装描写は両者で異なり，「無紋の青色」の唐衣を着用した〈綾聴

るされぬ年配女房〉は，『栄花物語』で「無文，平絹」を着用した〈色聴るされぬ女房〉とされている。この相違を中心に考察点を四つ挙げ検討した。（1）「綾聴るされぬ」は「色聴るされぬ」と同義ではなく，別ではないか。

「色聴るされぬ」女房は，無紋であっても青色の唐衣を着用することが許されず，「綾聴るされぬ」女房は，「無紋」であれば青色の唐衣を着用することができるということではないか。すなわち，次の三段階が想定できる。

「色聴るされたる」女房

「綾聴るされぬ」女房

「色聴るされぬ」女房

（2）「無紋」と「平絹」は定説では同義とされてきたが，別ではないか。

「無紋」には，平絹説と無地説が存在する。

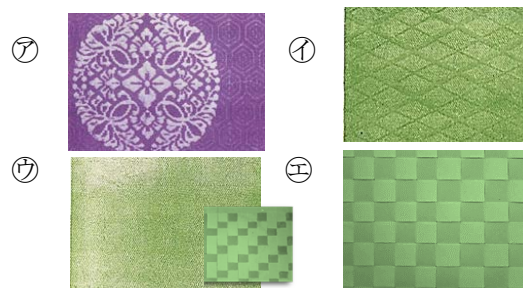
（3）禁色に関わる唐衣の生地は四種になる

㉠ 二陪織物

㉡ 地紋のある綾（練緯等）

㉢ 地紋のない綾（無紋）

㉣ 平絹（平織りの絹織物）



（図の㉠㉡㉢は『織文図譜』[3]より。㉣右下と㉣は手製で組織の拡大図とする。）

（4）「綾聴るされぬ」女房は，「おとなおとなしき」と「若き人」で区別される。

3. 結果と考察

- (1) 〈綾聴るされぬ女房〉は〈色聴るされたる女房〉と区別されるにも関わらず、禁色の青色の唐衣を着用している。従って、青色を着用できない〈色聴るされぬ女房〉とも異なることが分かる。従来、〈色聴るされたる女房〉と〈色聴るされぬ女房〉の二段階だった禁制だが、中間に〈綾聴るされぬ女房〉を入れることで三段階とし、「無紋」であれば青色が着用できるという部分的な禁色が聴るされる立場があったと考える。
- (2) 〈綾聴るされぬ女房〉が青色の唐衣を着用するための条件は、生地に紋様を施していないことだと考える。『栄花物語』で「無紋」と「平絹」が併記されており、両者は別物である。
- (3) ㊦二陪織物、㊧地紋のある綾は禁色のため、〈色聴るされたる女房〉のみ着用できる。㊨地紋のない綾（無紋）は、〈綾聴るされぬ女房〉も着用できる。㊩平絹は、〈色聴るされぬ女房〉でも着用できる。したがって、「綾聴るされぬ」の「綾」とは㊦㊧で、〈綾聴るされぬ女房〉はこの二つを聴るされていない。
- (4) 〈綾聴るされぬ女房〉は、年齢によって衣装が分けられていることから、〈綾聴るされぬ若き女房〉も「無紋」すなわち斜文組織の唐衣を着用していると思われる。たとえ「無紋」でも青色の唐衣が着用できない代わりに、「菊の五重の唐衣」を着用している。これは、菊の重ねを用いた、袴（ふき）が五枚重ねの唐衣のことで、青色や蘇芳といった晴れの場にふさわしい色使いをしていたと思われる。年齢が高いからと言って誰しもが青色を着用できるわけではなく、女房の身分や働きが大きな要因として挙げられる。〈綾聴るされぬ女房〉とは、中臈のうち小上臈になる女房で、掌侍や命婦がこれにあたる。『日記』で〈青色の無紋の唐衣〉を着用した女性たちは、ある種、一日晴のような扱いであると言っていると考えられる。

4. まとめ

従来、〈色聴るされたる女房〉と〈色聴るされぬ女房〉の二段階だった禁制だが、間に〈綾聴るされぬ女房〉を入れることで三段階とし、「無紋」であれば青色が着用できるという部分的な禁色が聴

るされる立場があったと考える。しかし、赤色や青色でなければ二陪織物や紋様のある綾が聴るされていたということは考えられず、このような織物は生地の色に関係なく禁色である。

〈綾聴るされぬ年配女房〉の唐衣にわざわざ「無紋」の語が付くことから、〈色聴るされたる女房〉が着用する禁色の織物の青色と区別されることが分かる。従って、〈綾聴るされぬ年配女房〉が青色の唐衣を着用するための条件は、生地に紋様を施していないことだと考えられ、「無紋」は斜文組織といえる。〈綾聴るされぬ年配女房〉と区別された〈綾聴るされぬ若き女房〉も、斜文組織の唐衣を着用していると思われる。

〈綾聴るされぬ年配女房〉は、唐衣の表地に青色の斜文組織を用い、その袴に紋様のある綾の裂（中陪）を三枚挟んで、裏地にも中陪と同じような生地を使っていると考えられる。また、桂は中陪一枚の三重のものと、中陪三枚の五重のものを重ねて着用していると考えべきである。どの衣装も、菊の重ねで統一していると考えられる。

『日記』を含めた文学作品や古記録等に〈無紋の青色の唐衣〉は多く見られるものの、〈無紋の赤色の唐衣〉の用例はない。赤色の唐衣は、生地質地に関わらず禁色で、青色だけが儀式等で小上臈女房にも着用されたことが窺える。

主要参考文献

- [1] 源雅亮『雅亮装束抄』（群書類従）
- [2] 伊藤博校注『紫式部日記』（新日本古典文学大系、岩波書店、一九八九年）
- [3] 『織文図譜』（『新訂増補 故実叢書』明治図書出版）
- [4] 宇都宮千郁「平安の織物について」（河添房江編『平安文学と隣接諸学9 王朝文学と服飾・容飾』竹林舎、二〇一〇年）
- [5] 畠山大二郎「第三章 『紫式部日記』の「無紋の青色に桜の唐衣」―三重襲と無紋綾織組織の問題を中心として―」（『平安朝の文学と装束』新典社、二〇一六年）

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成（DB2937）を受けたものである。

明治知識人の東西文化理解と漢字使用

——『米欧回覧実記』の漢字・漢語を例に——

Meiji intellectuals' the understanding of East-West cultures and the usage of Kanji

— As the examples of Kanji and Kango on *Beiou Kairan Jikki* —

宗近 水穂

Mizuho Munechika

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 国際文化専修

キーワード：漢字使用，明治時代，文化理解

Key words : usage of Kanji, The Meiji Period, Cultural understanding

1. 目的

東アジアには「漢字」を共通としたアイデンティティがある。これは東アジアの文化圏が中国で発生した漢字を媒体として成立したこと、漢字が第二次世界大戦前後まで東アジア各国の共用文字であったことなどからいえるだろう。

日本語の語彙は江戸時代末期から明治時代にかけて大幅な更新が行われた。これが西洋文明を全面的に導入した時期と重なり、主に明治期の日本の知識人が漢語をもって日本語の中に取り入れた。

本研究では、日本語の過渡期である明治初期に書かれた『米欧回覧実記』(以下『実記』)を通じて、明治知識人による漢字使用が西洋文化の吸収や東洋文化の伝承にどのような役割を果たしているかを実証し、その傾向性を明らかにすることを目的とする。このことによって漢字を表記としての道具だけでなく、文化の吸収や伝承、東アジア文化圏のアイデンティティとの関係における役割を考え、日本語の漢字使用の意味を捉えなおす。

2. 方法

本研究では、『実記』を中心とした資料に基づいた実証と比較分析を主な方法とする。

実証にあたり、『実記』の一般的な漢字使用をみるため、第 82 巻における普通名詞、地名・人名、専門用語の表記を、漢字の構成やその意味、また漢字・仮名・振り仮名の関係をみながらその特徴を考察する。そして、語彙の単位を越えた表現に漢字がどのような役割を果たしているのかを明らかにするため、文化比較、典故などを使った表現

を抽出し、その傾向性を考察する。

比較分析にあたり、『実記』原文における漢字使用の意味や特徴をみるため、水澤周氏による『現代語訳 米欧回覧実記』(慶應義塾大学出版, 2008)との検証を行い、現代語にどのように反映されているか、その関連性を明らかにする。

3. 分析結果

資料として扱う『実記』が書かれた時期における日本語の状況を把握するため、まず日本語と漢字の歴史や近代日本の漢字使用を概観した。日本では独自の文字(仮名)をもつようになって、長い間漢字(漢文)が正式な文章に用いられ、明治近代においては漢文を書き下した形である訓読文・訓読体が公式文体として使用されるようになった。また国字国語問題や辞書の整備など明治期の日本語は転換期を迎え、このような日本語の状況下において『実記』は漢字・漢語を多用した漢文訓読文で記述されている。

『実記』の例言に、仮名は誤解が生じやすく、漢字を用いるのは誤解を防ぎ、視覚的に明らかにするため、と述べられており、ここに筆者久米による漢字使用の方向性を見ることができる。

実際に『実記』の表記には、文物・概念に対する表現の正確さや、専門的な名称の明確さよりも日本語の揺れや漢字の表意性を利用しながら、意味や様子を描写しようとする工夫がみられた。そして筆者久米によって伝統的な漢語から革新的な漢語までを使用しながら表記されていることが確認された。

例えば普通名詞は、それぞれの国、また個人によって認識の異なる文物の名称だが、当時の日本の書物に用いられていた西洋の新しい概念語や、中国語を参照したとも考えられる漢語があった。また日本語の意味の補足や漢字の意味の特定、そして原語の音を表すための振り仮名が振られた漢字表記もみられた。

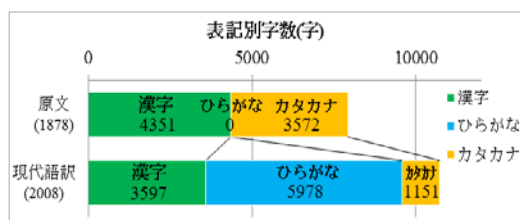
地名・人名は、本来外国語、つまりアルファベット表記の語が意識、音訳され漢字表記になっている。漢訳洋書や英華字典を参照したと考えられる漢字表記に振り仮名が振られていることも多く、このような表記手段がとられていたのは、漢字によって既存概念を連想させ、仮名で実際の外来語の音や意味を補足するためだと考えられる。

専門用語の場合は基本的に振り仮名が振られておらず、そのものを正確に表すのではなく、形容した漢字で表記されている。これは久米自身がそれぞれの専門的な知識をもっておらず、また専門的な技術を表す文物を読者にある程度理解してもらえればよいと久米が判断したためだと考えられる。このように筆者久米によって伝統的な漢語から革新的な漢語までを使用しながら表記されていることが確認された。

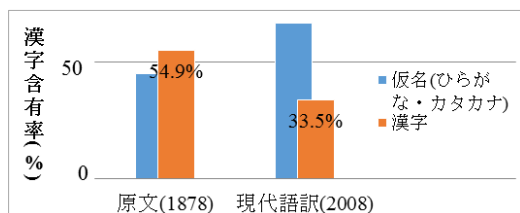
久米の漢学の知識が多く利用された表現には、読者に共有されていた自国の文化、あるいは東洋文化についての知識を利用し、西洋文化と比較しながら記述することで理解を促進させる手法をとっていた。

さらに『実記』原文と現代語訳の表記別字数と漢字含有率を調べた結果、それぞれグラフ 1 とグラフ 2 になった。

[グラフ 1]『実記』第 82 巻における表記別字数の変化



[グラフ 2]『実記』第 82 巻における漢字含有率



これらのことから、現代語訳より原文の方が文字数は少ないが、漢字含有率が高いため、原文で使用されている漢字は、現代の漢字より多くの情報量をもっているといえる。

そして現代語訳との比較分析から、原文の漢字には、より多くの文化伝達機能や背景知識を連想させるような辞書的機能があり、また明治知識人はその漢字の表意性を自在に駆使していたと考えられる。

以上のことから、明治初期の漢字・漢語は日本文化のあり方や中国文化を日本語で表記する機能を果たすだけでなく、西洋文化の解釈を表現する文化伝達の役割をも担っていることが示唆された。そして明治知識人による漢字使用は、日本語の近代化だけでなく、和漢洋の文化を吸収・融合・伝承するという日本的な近代化にも不可欠な要素となっていた。

4. 今後の課題

本研究では、久米邦武を明治知識人の一人としてみてきた。今後の課題として、『明六雑誌』など他の同時代の知識人による文献においても同様の漢字使用の傾向にあるのか、分析する必要がある。また現代日本語の中の漢字使用のあり方と文化的な関係について、さらに考察を深めたい。

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所平成 29 年度「大学院生研究助成(B)」(課題番号 DB2933)を受けたものである。

主要参考文献

- [1]久米邦武『特命全権大使米欧回覧実記』博聞社 (1878) 国立国会図書館デジタルコレクション
- [2]久米邦武 田中彰校注『特命全権大使米欧回覧実記』[全 5 巻]岩波文庫 (1977)
- [3]久米邦武著 水澤周訳『現代語訳 特命全権大使米欧回覧実記 普及版』[全 5 巻]慶応義塾大学出版 (2008)
- [4]木村一「『特命全権大使米欧回覧実記』の漢語外国語のカタカナルビとの対応」『文学論藻』(76), (2002) pp.268-252
- [5]朴省姫『特命全権大使米欧回覧実記』に現れる西洋地名の漢字表記に関する研究『環流する東アジアの近代新語訳語』沈国威・内田慶市編ユニウス(2014) pp.155-176

日本社会における難民の受け入れに関する研究

—日本の難民に関する新聞報道の検討を中心に—

A Study on Acceptance of Refugees in Japan

—Through Content Analysis of Newspaper Articles on Refugees in Japan—

栃木 美冴

Misae Tochigi

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 現代社会研究専攻 臨床社会学専修

キーワード：難民，新聞報道，支援，法律

Key words : Refugee, Newspaper Articles, Assistance, Law

1. 目的

近年，日本のメディアでも難民問題はたびたび報じられる。難民に関するメディアの情報において，中東のシリアやミャンマーからの難民の報道が多いことに気づく。しかし，日本社会にいるわたしたちが難民の問題を自分の問題として考えるのは難しいのではないだろうか。

本研究は外国の難民の問題を「自分の問題として実感できない」「想像することが難しい」ことこそ，問題ではないかという認識から出発している。

日本社会における，難民への想像力の欠如や，難民問題への無関心な態度について考えてみると，より広い意味で他者に対する想像力の欠如や無関心は，差別という行為へとつながっていくのではないかと考えられる。その意味で，難民に対する私のかつての，そして現在の日本社会における無関心は，日本人から難民への差別へとつながる可能性がある。

本論は，日本社会における難民の位置や現状の分析と，日本国内の報道が難民をどう伝えたのかを明らかにすることで，日本人と難民の関係の構造の一端を明らかにすることを目指す。

2. 方法

本研究ではまず，研究対象とする難民が誰なのかを文献研究から明確にする。次に，国内の受け入れの現状を分析するために，難民に関連する日本国内の法律と制度の現状を文献研究から考察する。それに加え，公益社団法人アムネスティ・インターナショナル日本へのヒアリング調査から，日本国内で行われる難民支援活動の現状を検討して

いく。

これらを踏まえ，日本国内の難民に関する問題をメディアがどのように捉え報道しているのかを新聞の内容分析から明らかにする。そのために，全国紙の中で普及率がもっとも高い朝日新聞と読売新聞をとりあげ，この2紙における1970年から2017年までの難民報道を中心に，記事の検討と内容分析を行った。この作業のために使用したデータベースは読売新聞は「ヨミダス歴史館」，朝日新聞は「聞蔵Ⅱビジュアル・フォーライブラリー」である。

難民報道の記事を抽出する作業は次のように行った。まず読売新聞と朝日新聞が新聞社として難民に対しどのような姿勢で臨んでいるかを知るために社説に注目することにした。そこで「難民 AND 社説」で検索し，ヒットした記事の中から日本国内の難民に関して書かれた記事を選び，それらの記事に関し内容分析を行っていくという方法を採用した。

次に，社説以外で登場する難民関連報道を調べるために，同じデータベースを用いて，1990年から2017年5月1日までの期間において「難民認定申請」で検索した。ヒットした記事の検討を行う際に，どこの難民か，すなわち難民の地域性を明らかにするために，統計ソフトであるRと形態素解析エンジンのMeCabを利用した。それによって記事に登場する外国名を特定し，その登場回数を数えることができた。

3. 結果と考察

本研究で対象とする難民とは，条約難民，イン

ドシナ難民,「第三国定住者」,「人道的配慮」「難民認定申請者」の人々である。

難民認定申請者は,日本国内での地位が不安定であり,日本に定住する際,他のタイプの難民と比べ生活上の負担が大きいことが法律と制度の検討から明らかになった。

公益社団法人アムネスティ・インターナショナル日本(以下 AIJ)において実施したヒアリング調査からは,AIJ は個人に直接的支援をするのではなく,アドボカシー政策提言という方法で間接的に難民支援を行う団体であることがわかった。また,シンポジウムなどのイベントを通じて,難民問題に関し日本社会に情報発信することや,行政に対し意見を述べることに重きを置いていることがわかった。このことから,AIJ は難民問題と日本社会の仲介役と捉えることも可能であるといえる。

新聞の内容分析からわかったことは以下の通りである。新聞報道に登場する難民の出身国はインドシナ難民をはじめ,アジア圏の国々に偏っているということである。また,報道される難民像は支援が必要な人びととして,立場の弱さが伝えられていた。難民の困難を反映していると考えられる。法律・制度の面から,「難民認定申請者」,「人道的配慮」は,他のインドシナ難民,「第三国定住者」の人々に比べ安定した地位ではないことが明らかになった。また「第三国定住者」とインドシナ難民に関しても報道によれば支援の必要性,立場の弱さを伝えていた。インドシナ難民,「第三国定住者」の場合,日本社会においては比較的安定的な地位の難民として,受け入れられている。しかしながら日本で暮らすうえでは立場の弱い人々であることを示していると考えられる。

社説の検討からは,1970 年から 1989 年のインドシナ難民は,受け入れがたくとも受け入れなければならない人たちというイメージとして報道されていた。さらに制度として受け入れた後も,依然として日本社会にとって受け入れられがたい人々として認識されていることが,報道から読み取ることができた。

4. まとめと今後の課題

本研究を通じて,日本社会における難民への関心はアジアの近隣国との問題として考えられてきたことが示された。さらに,条約難民としての受け入れ人数の少なさが,難民を日本国内の問題と

して考えることを難しくしている可能性があると考えられた。

「難民」を検索語とした時の検索結果に比べ,難民に関する社説は非常に少ない結果となった。また,「難民認定申請」を検索語とした記事は,つたえられた難民の国籍,つまり,地域性に重点を置いて検討したため,条約難民,インドシナ難民,「第三国定住者」,「難民認定申請者」,「人道的配慮」がそれぞれに報道の中でどのように伝えられてきたのかが見えにくくなってしまった。

こうした限定の中で考察したものであることを確認しておく。

したがって,本研究で対象とした難民,すなわち条約難民,インドシナ難民,「第三国定住者」,「難民認定申請者」,「人道的配慮」がそれぞれに報道の中でどのように伝えられてきたのかを検討することが今後の課題として残った。

また,筒井が指摘した「潜在的難民申請希望者(筒井 2014:)」の人々は,現実には難民であるにもかかわらず,諸事情により難民認定申請をしない選択肢をとらざるを得ず,日本で定住していくために,難民認定申請者よりさらに生活の負担が大きくなることもありうる。しかし,難民認定申請の統計からは見えない人々である。これらの人々についても,法律,制度や支援,報道のから面から実態を研究することが課題である。

主要参考文献

- [1] 小泉康一 1998『難民とは何か』三一書房
- [2] 石川えり「第 1 章日本における難民の状況と社会統合の課題」墓田桂・杉気明子・池田丈佑・小澤藍編著 2014『難民・強制移動研究のフロンティア』現代人文社
- [3] 市野川容孝 2007「2 章 難民の定義と国際法」市野川容孝・小森陽一『思考のフロンティア 難民』岩波書店
- [4] 滝澤三郎 2017「第 30 章第三国定住の試み」滝澤三郎・山田満 編著「難民を知るための基礎知識」明石書店
- [5] 墓田桂 2016『難民問題 イスラム圏の動揺,EU の苦悩,日本の課題』中公新書
- [6] 筒井志保 2010「19 日本の難民政策～NGO の難民支援の現場から～」黒沢 文貴編『戦争・平和・人権―長期的視座から問題の本質を見抜く眼』原書房

避妊に関する女性の「自己決定」のあり方

—低用量ピルに対する女性の意識に関する分析から—

Women's Self-decision on Contraception
—Focusing on the Low-dose Oral Contraceptives—

原島 伶奈
Reina Harashima

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 現代社会研究専攻 臨床社会学専修

キーワード：ジェンダー、自己決定、避妊、低用量ピル

Key words : Gender, Self-decision, Contraception, Low-Dose Oral Contraceptives

1. 研究目的

本研究では、避妊に関する自己決定について考察を加えることを目的としている。

塚原久美は「女性には自らの生殖機能をコントロールするための避妊の情報と手段が提供されるべきであり、その使用は女性たちの自由意志に基づいて決定されなければならないはずである」（塚原 2014: 33）と述べている。また、松本彩子は日本において低用量ピル（以下、ピル）が忌避されつつも『女の主体性』の象徴（松本 2005:171）としても考えられてきたことを指摘している。

本研究ではこれらの先行研究の示唆を受け、コンドームによる避妊と「主体的な避妊法」とされるピルによる避妊を比較することで若い女性の視点から女性の自己決定のあり方を明らかにする。

2. 使用したデータと避妊実行状況の分析

本研究では若い世代の避妊実行状況を把握するために、量的分析として日本性教育協会が1974年から6年おきに実施している「青少年の性行動調査」結果の二次分析を行った。分析結果は以下の三点にまとめられる。

第一に「場合によって避妊をしたりしなかったりする」という避妊パターンが男女問わず常に一定の割合を示している。最新データの2011年では男性に16.6%、女性に23.0%である。ただしこの数値は1999年に比べ減少傾向にある。

第二に、避妊にコンドームを使用する割合は1999年89.8%、2005年97.5%、2011年96.0%と避妊法の中で最も高い。コンドームは性交渉においてその都度、使用する。そのため「場合によって避妊

をしたりしなかったりする」という避妊パターンを可能にすると考えられる。

第三に、避妊を実行しない理由の中で「多分妊娠しないと思うから」「言い出せないから」「相手に断られるから」の3つが女性に多く、その差は有意であった。これらの理由は「場合によって避妊をしたりしなかったりする」という避妊パターンの「場合」を部分的に説明していると考えられる。

以上の三点から本論では「その性交渉において生じることによって避妊をしたりしなかったりする」という避妊パターンを示す「曖昧な避妊」というカテゴリーを設定した。この曖昧な避妊は、性交渉のその都度、使用の選択をする必要のあるコンドームによる避妊において生じる。

3. インタビュー調査と避妊に関する語りの分析

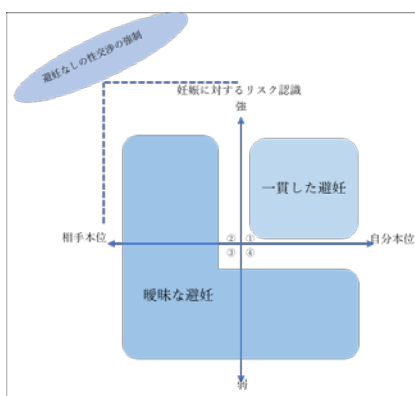
本調査は20代の未婚女性を調査対象にし、ピルユーザーの女性2名に個別インタビューを、非ピルユーザーの女性4名にグループインタビューを実施した。語りの分析の焦点は以下の二点である。すなわち、第一にコンドームによる避妊においてどのように女性は避妊の実行を決定しているのか（または決定していないか）。第二に、女性によってピルは「主体的な避妊法」として認識されているのか、ということである。

未婚の若い女性の避妊に関する語りはそれぞれバリエーションに富むものであるが、本研究では2つの軸（図表1）から語りの分析を試みた。縦軸は「妊娠に対するリスク認識」⁽¹⁾という軸であり、見積もられた妊娠可能性と、妊娠を避けるべきこ

とと捉えているその度合いの積から示される。横軸は「相手本位/自分本位」という軸であり、相手のコンドーム使用拒否といった意向に合わせるか、それとも自身の避妊に対する意志を優先するかということを示す。

図表 1 における「一貫した避妊」とは望まない妊娠を男性の意向にかかわらず回避しようとする避妊パターンを指す。それに対し「曖昧な避妊」とは女性が望まない妊娠を避けようと強くは思っていない、あるいは簡単には妊娠しないと思っている場合や、男性のコンドーム使用拒否に応じざるを得ない場合など多様なパターンを含む。なお、図表 1 の欄外に「避妊なしの性交渉の強制」を位置付けたのは、本インタビュー調査で調査協力者から性暴力といえる経験が語られたためである。

図表 1. 避妊に関する語りの分析枠組み



しかし女性の避妊の実行を最も左右するのはこの2つの軸ではなく男性との関係性であった。例えば、男性と交際関係にあるならば、

望まない妊娠をすることになっても「デキ婚」という選択肢があるため避妊の必要性が薄れるということが語られた。つまり妊娠に対するリスク認識が弱くなるということである。この意味で図表 1 は 2 軸によってのみ分析を試みたもので、避妊の語りを位置づけるための暫定的なものである。

第二の焦点では以下のことが明らかになった。すなわち、ピルは「主体的な避妊法」とであると考えられてきた一方で、必ずしも現代の女性本人にはそのように捉えられていないということである。

ピルユーザーからは「自分で避妊ができる」という理由からピルの服用を始めたという語りを得ることができ、この語りは避妊における主体性を意味していると理解できる。しかし一方で主体性とは異なる文脈からの語りも得られた。例えば、ピルを服用しコンドームの使用を必要としない性

交渉を可能にすることで、「彼氏」に対する自身の価値を高めるという語りである。他にも、ピルユーザーに対する非ピルユーザーや男性からの差別や偏見があるために、その視線に対抗するための工夫が語られた。このことから、ピルは必ずしも女性の意志のみで避妊が可能な「主体的な避妊法」として理解されているわけではないことが考えられる。

4. 結論

本研究における以上の考察結果から次のことがいえる。すなわち、女性が避妊について決定する際、男性との関係性が条件や制約として働くこと、そしてピルは必ずしもそれらの条件や制約を乗り越え可能な「主体的な避妊法」として理解されているわけではないということである。避妊に関する決定が自己決定になり得ないとき、その問題は男性との関係性の中に生じていると考えられる。

注

(1) リスク認識が「見積もられた可能性」と「その事象をどの程度避けるべきこと」として捉えているのか」ということの積から構成されるという点と、避妊の実行には妊娠に対するリスク認識が大きく関連しているという点は 2017 年 11 月 30 日に東京大学バリアフリー支援センター星加良司准教授からいただいた指摘である。

謝辞

2016 年 11 月 26 日に実施したヒアリング調査では産婦人科医師早乙女智子先生に貴重なお時間と沢山のご教示をいただきました。また、2017 年 7 月から 2017 年 9 月にかけて行ったインタビュー調査では調査協力者の方々に貴重なお時間とご協力をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所「大学院生研究助成」(DB2829) (DB2927) による助成を受けたものである。

避妊実行状況の分析では、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター SSJ データアーカイブから「青少年の性行動調査 (日本性教育協会)」の個票データの提供を受けた。

主要参考文献

- [1] 塚原久美 2014 『中絶技術とリプロダクティブ・ライツ』 勁草書房
- [2] 松本彩子 2005 『ピルはなぜ歓迎されないのか』 勁草書房

青年期女子の過剰適応を規定する親子関係の諸要因について

—Masterson, J. F. の理論を踏まえて—

Predictors of over-adaptation among adolescent women from the viewpoint of parent-child relationship

—Based on J.F.Masterson's theory—

霞 麻紗子

Masako Kasumi

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：過剰適応，親の養育態度，重荷に感じた親からの期待，愛情撤去，愛情供給

Key words : Over-adaptation, Parental attitudes, Parental expectations as a heavy load, WORU, RORU

1. 問題・目的

日常生活において他者から見て環境適応的な人の中に、実は自分を抑えて過剰な努力をして他者に適応する人がいる。このように「環境からの要求や期待に完全に近い形で従おうとすることであり、内的な欲求を無理に抑圧してでも外的な期待や要求に応える努力を行うこと」を過剰適応という(石津, 2006)。過剰適応の規定要因として親の要因が多く研究され、勝田(2009)は親の養育態度・親からの期待・過剰適応との関連について、一貫しない養育態度の場合に親からの期待が高いと過剰適応傾向が高くなることを示唆した。

過剰適応の規定要因に見捨てられ不安がある。Masterson, J. F.(1980)は、境界性パーソナリティ障害(Borderline Personality Disorder)の基本的な障害は、分離—個体化期にあたる生後 18～24 ヶ月の子どもの母親の関わりで生じる見捨てられ不安に由来するとした。この時期に、子どもが過剰に母親に固執したり母親が子どもの自立を妨げる行動に出た場合、子どもの心の中で母親との関わりが、(a)母親の言う通りにしないと愛情を撤去される関わり(愛情撤去型対象関係部分単位:Withdrawing Object-Relation's part Unit ; WORU と略す)と、(b)母親の言う通りにすれば愛情が供給される関わり(愛情供給型対象関係部分単位:Rewarding Object-Relation's part Unit ; RORU と略す)に分裂するとした。Masterson は BPD の病因に幼少期の親子関係を挙げた(磯田, 2001 ; 湊, 2004)。境界例では、この WORU RORU の対象関係が母親以外の重

要な他者にも同様に生じると考えられる。

ところで、BPD の臨床群ではないが、WORU RORU に近い対象関係を持つ人、つまり WORU RORU 的傾向の人が過剰適応者の中にいるのではないか。勝田(2009)により、一貫しない親の養育態度を受け親からの期待を強く感じると過剰適応する者が健常群にいたことが明らかとなった。このような人の中に、親からの期待を実際は重荷に感じているが、期待に応えないと愛情を撤去されてしまうと感じ、期待に沿う過剰適応的行動を取る心理を持つ人が存在する可能性がある。これは WORU RORU 的傾向といえるだろう。しかし、過剰適応と WORU RORU の関連を調査した研究は未だなく、実態が明らかにされていない。本研究では、青年期女子における中学生までの親の養育態度・高校生での親からの期待を重荷に感じる程度・現在の過剰適応傾向の関連を明らかにする(目的 1)。さらに親からの期待を重荷に感じて過剰適応する群は WORU RORU 的傾向が高いと想定し、過剰適応の生起過程、特に、WORU RORU 的傾向が存在するかを明らかにする(目的 2)。

2. 方法

研究 1

A 女子大学生 145 名(平均 20.92 歳)に対して、過剰適応を測定する青年期前期用過剰適応尺度(石津, 2006)、養育態度を測定する Parental Bonding Inventory(PBI)日本語版(小川, 1994)、重荷に感じた親の期待を測定する親からの期待尺度(春日・宇都宮, 2011)から構成される質問紙を実施した。

研究 2

研究 1 の結果から、親の期待を重荷に感じる程度と過剰適応傾向がともに高く、且つ、研究 2 の調査協力に同意が得られた計 2 名(A,B とする)に、半構造化インタビュー調査を行った。また対象者に許可を得て、内容を IC レコーダーを用いて録音した。調査には 1 時間であった。調査終了後、謝礼を渡した。分析は KJ 法と CCRT 法を参考とした。それにより、過剰適応エピソードの抽出を行い、また、「何が起きていてそれに対して自分がどのように感じて行動したら」「相手がどう行動して」「それに対して自分はどうか感じたか・どう行動したか」という観点から、過剰適応と WORU RORU の構造の共通性について比較検討した。

3. 結果と考察

研究 1

因子分析の結果、親の養育態度は、養護(独立支持)と過保護(独立阻害)の 2 因子構造であり、重荷に感じた親からの期待は、教育・就職期待と人間性期待の 2 因子構造であった。さらに、過剰適応は外的適応と自己抑制と自己不全感の 3 因子構造であった。また、重回帰分析を行い、親の養育態度が重荷に感じていた親からの期待を介して過剰適応に及ぼす影響について検討した結果、中学生までに過保護的な親の養育態度を受けていたほど、高校生で親からの教育や就職への期待を重荷に感じる程度が高く、現在は他者に対して外的適応をして、自己抑制をしていることが明らかとなった。一方で、中学生までに過保護的な親の養育態度を受けていたほど、高校生で親からの人間性への期待を重荷に感じる程度が高いが、現在の他者に対する外的適応や自己抑制は低くなることが明らかとなった。仮説は一部支持された(図 1)。

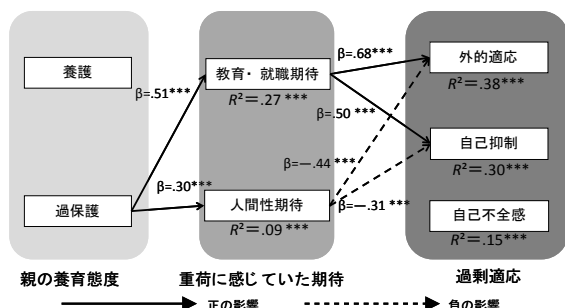


図 1. 親の養育態度が重荷に感じた期待を経て過剰適応に及ぼす影響についてのパスダイアグラム

研究 2

インタビュー調査のデータを基にした質的分析

の結果、2 名の対象者の過剰適応プロセスはどちらも、幼少期から親との間で生じていたことが明らかとなった。また、その体験が続くことで、自己の意思や欲求を抑制して親からの期待や要求に沿おうと努めていた。さらに親子関係の中で過剰適応することによって、その対人関係パターンが友人などの他者に対しても行われる場合があることが示唆された。そして、幼少期に最も身近な他者である両親から自身の主張を受容されないことが、過剰適応の生起要因と成り得ることが見出された。

過剰適応の構造と WORU RORU の構造を比較した結果、対象者の過剰適応体験のパターンは WORU RORU のパターンと類似性が高かったものの、対象者は WORU RORU の基礎となる見捨てられ不安を感じていなかった。そのため、本研究では過剰適応傾向の高い者に WORU RORU 的傾向があることは実証されなかった。

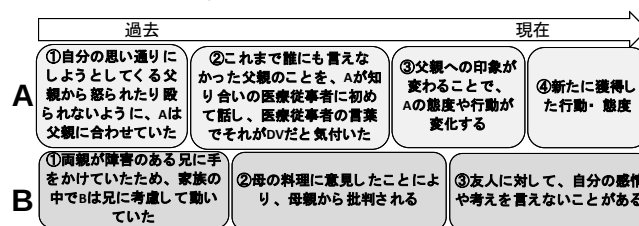


図 2. 対象者の過剰適応プロセス概略

4. 今後の課題

本研究において、健常群の過剰適応者に WORU RORU 的傾向を見出すことの難しさや、調査対象者数が少なかったことが課題とされる。WORU RORU の重要概念である見捨てられ不安を質問紙調査において測定することで、より緻密な対象者選定を行えることが考えられる。また、これまで過剰適応の生起だけではなく、脱却の過程とその要因を明らかにすることによって、過剰適応者の援助に有用となると期待できるだろう。

主要参考文献

- [1] 石津憲一郎(2006). 過剰適応尺度作成の試み 日本カウンセリング学会第 39 回大会発表論文集, 137.
- [2] Masterson, J. F. (1980). From Borderline Adolescent to Functioning Adult: The Test of Time. (マスターソン, J. F. 作田 勉・恵 智彦・大野 裕・前田 陽子(訳)(1982). 青年期境界例の精神療法——その治療効果と時間的経過—— 星和書店)

妊娠期～出産後における女性の心理的変化と心理的サポート

—女子大学生および母親の妊娠・出産イメージと母子画：

働く母親への半構造化面接—

Psychological Process of Women during Pregnancy and shortly after Childbirth
and Psychological Support to them

—Images of Pregnancy and Childbirth and Mother and Child Drawings of Female College Students and
Mothers : Semi-structured Interviews with Working Mothers—

神沢 美波

Minami Kamizawa

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：妊娠出産イメージ，働く母親，心理的サポート，母子画，複線経路・等至性モデル(TEM)

Key words : Images of Pregnancy and Childbirth, Working mother, Psychological support,
Mother and child drawings, Trajectory equifinality model

1. 問題と目的

妊娠期～出産後は心身ともにリスクの高い時期であり，女性への心理的サポートは不可欠である（永田，2011）．特に働く女性にとっては待機児童等の問題もあり，妊娠出産にまつわる困難が多い状況である．そこで本研究では，妊娠出産についてのイメージと妊娠期～出産後の女性の心理的変化を明らかにし，妊娠期～出産後の働く女性の心理的サポートを導き出すことを目的に2つの研究を行う．今回は母子へのイメージを把握するために，本人も意識していない母子に対するイメージが表現される母子画（Gillespie1994）を用いる．

2. 研究1

目的：女子大学生と出産経験者の間で妊娠・出産に関するイメージにどのような差があるか自由記述と母子画，尺度を用いて明らかにする．

方法：

- ・対象者：女子大学生 97 名，出産経験者 76 名
- ・調査内容：妊娠・出産へのイメージと必要なサポートについての自由記述，母子画，対児感情尺度改訂版を実施

結果と考察：

1) 妊娠・出産と必要なサポートへのイメージ

妊娠・出産と，必要なサポートについての自由

記述を KJ 法により分析した．出産経験者は女子大学生に比べてより豊かな妊娠・出産イメージを持っていた．また，出産経験者が必要と考える「孤独にさせない」「母親が社会の風潮に縛られない」サポートについての記述は女子大学生にはほとんど見られず，出産経験者と女子大学生間で認識に差がある事が分かった．出産経験者の求める心理的サポートの多くは周囲の人物から受けるものであり，妊娠期～出産後についての心理教育を妊婦・母親以外にも行う必要性が示唆された．

2) 母子画

馬場（2005）の基準に従い母子画得点を算出した．また，母子画得点ではとらえきれない描画全体の統合度を筆者らが独自に「絵として，違和感なく全体がまとまり，温かみがあり，生き生きした印象を受ける絵」と定義し統合度得点（1～5 点）を算出した．母子画の統合度の高低の典型例を図1～4に示す．平均値の差をみると，出産経験者の方が女子大学生と比べて統合度の高い母子画を描き($t(169)=5.67, p<.001$)，母親像のサイズ($t(169)=2.99, p<.01$)と子ども像のサイズ($t(167)=5.28, p<.01$)が大きかった．また，母子画では一般的に母子が1対1で描かれるが（馬場，2005），出産経験者の3割は子ども像を複数描いており，子育て中の母親は母子関係を

強く意識するため、自分と子どもの実際の姿を描く場合があると考えられよう。

3) 対児感情尺度改訂版

対児感情尺度の平均の差をみると、出産経験者の方が女子大学生より赤ちゃんへの肯定的感情が高かった ($t(128.1)=3.23, p<.01$)。また、対児感情尺度と母子画の統合度について相関分析を行った結果、統合度の高い母子画を描く者は、赤ちゃんへの肯定的感情が高いことが明らかになった ($r=.230, p<.01$)。

3. 研究 2

目的：働く女性の妊娠期～出産後の心理的プロセスを半構造化面接、母子画により把握し、心理的サポートについて検討する。

方法：

- ・対 象 者：子育て中の働く母親 3 名
- ・調査内容：半構造化面接、母子画、対児感情尺度改訂版を実施した。

結果と考察：

1) 半構造化面接

子育て中の働く母親 3 名に半構造化面接を 3 回実施し、TEM (複線経路・等至性モデル Trajectory Equifinality Model) (安田・サトウ, 2012) により分析し作成した TEM 図を提示してフィードバックした。TEM 図を用いて 3 回面接を行ったことにより、妊娠～出産後の出来事や気持ちへの振り返りが生じ、より深く理解することにつながった。

その結果、妊娠判明～出産期には、子どものエコー写真を見たり胎動を感じ、周囲から妊婦として接される体験をして「妊娠を受け入れ」「子どもの存在を実感」していた。出産時には、妊娠期からイメージを膨らませていた赤ちゃんと実際に対面してその存在を実感し「赤ちゃんとの出会い」「母親となる実感」が起こっていた。出産後、子育てが大変な一方、子どもの成長に大きな喜びを感じており、子どもを通してポジティブ、ネガティブの両感情を強く抱いていた。復職時には、一緒に過ごせた育休期間の振り返りが生じ、「子ども

の成長を感じる」「子育ての振り返り」が起こっていた。心理的サポートとして、ネガティブな感情の受け止めに加え、子どもの成長などポジティブな側面を評価することが重要だと考えられた。

2) 母子画

協力者 2 名は実際の自分と子どもを描き、2 回目以降の絵で母子像が大きくなった。また、他の 1 名は自分以外の母子をイメージして描いたが回を追うごとに子ども像が大きくなり、母親像の腕もしっかり子どもに回される絵へと変化した。面接で妊娠～出産後の振り返りが起こり、母子関係が強く意識された結果だといえよう。

4. 全体考察 研究 1・研究 2 を通して

女性は子育ての中でポジティブな感情とネガティブな感情両方を強く抱いており、妊娠・出産・子育ての中でそのイメージが徐々に深まり豊かになると考えられる。女子大学生と出産経験者のもつイメージの豊かさに差があることから、妊娠・出産は、未経験の女性が想像するよりも実際には情緒が大きく揺さぶられる体験だといえよう。妊娠～出産後の情緒的体験について心理教育を行うことが出産未経験者へのサポートとなるであろう。また、広く一般に妊娠～出産後についての知識が広がることで、妊娠期～出産後の女性が求める周囲からの理解や支援につながるであろう。

5. 今後の課題

心理的変化の重要点や必要なサポートについて、焦点を絞った研究や、妊娠～出産後についての心理教育の実践に向けた研究が必要であろう。

6. 文献

馬場史津 (2005) 母子画の基礎的・臨床的研究 北大路書店

Gillespie, J. (1994) The Projective Use of Mother and Child

Drawings: A manual for clinicians. New York: Brunner/Mazel.

下恵美子・石川 元 (訳) (2001) 母子画の臨床応用—対象関係論と自己心理学 金剛出版

永田雅子 (2011) 周産期のこころのケア 遠見書房

安田裕子・サトウタツヤ (編) (2012). TEM でわかる人生の経路 誠信書房



図 1 出産経験者 統合度 5.0



図 2 出産経験者 統合度 3.3



図 3 女子大学生 統合度 4.7

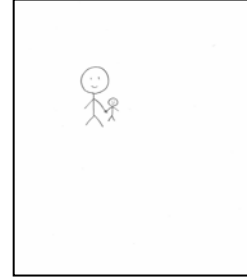


図 4 女子大学生 統合度 2.3

アサーションが摂食障害傾向および自尊感情に及ぼす影響

The influence of assertion training on eating disorder tendency and self-esteem

齋藤 日向子

Hinako Saito

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：アサーション，アサーション・トレーニング，摂食障害傾向，自尊感情

Key words：Assertion, Assertion training, Eating disorder tendency, Self-esteem

1. 目的

思春期・青年期は身体の成長とともに精神的な成長が求められ，不安定になりやすいために心の問題が生じやすい。なかでも，好発年齢が思春期・青年期とされる摂食障害は近年増加傾向にあり，発症の若年化や遷延化などが取りざたされている。しかし，食行動異常は本人の自覚がなく改善への動機づけも希薄であるため，指導・治療につなげることは難しい。山崎（2015）も指摘するとおり，摂食障害の予防的支援や早期対応は重要であり，医療現場に限らず臨床心理士のサポートが求められている。

摂食障害は，病状がさまざまに標準的治療と言える技法が確立していないため，多くの臨床現場では心理療法，薬物療法，家族療法，認知行動療法などを組み合わせて総合的に行っている現状にある。摂食障害治療において，対人関係療法（以下 IPT）は最近注目されているエビデンス・ベーストな心理療法である。IPT は症状そのものではなく対人関係問題の領域に焦点を当てることにより，併存障害にも同時に効果を表すため，さまざまな精神科的問題にも適応可能であることが期待できる。よって，摂食障害の予防的支援においても IPT の考え方は大変有効であると考えられる。

そこで筆者は，対人関係領域を扱っており，学校臨床場面で自尊感情の向上やストレスの減少に効果が示されているアサーション・トレーニング（以下 AT）に注目し（佐藤・高田，2011，2013），摂食障害予防への有用性を検討することとした。

その際，筆者は自尊感情に注目した。というのも，摂食障害者の特徴として自尊感情の低さが指摘されており，また，臨床群ではない摂食障害傾

向者においても同様の特徴がみられることが明らかとされているためである。

以上より本研究では，摂食障害に焦点を当て，AT をベースに摂食障害への予防的プログラムを開発する基礎的な研究を行うことを目的とした。

本研究の具体的な目的は，女子大学生を対象に，アサーションと自尊感情および摂食障害傾向について以下の2点を検討することであった。

まず第1研究で，アサーション，自尊感情，摂食障害傾向の関連について，質問紙調査を用いて実証的に検討し，明らかにする。

次に第2研究で，第1研究の検討結果をふまえて一般的な人々に対する AT を作成，実施し，その効果について検討する実践的な教育研究を行う。

2. 第1研究

2-1. 方法

調査時期：2016 年 11 月～2 月

調査対象者：A 大学の女子大学生 184 名（平均年齢 20.5 歳，SD=1.3）

調査方法：個別自記入式の質問紙調査

質問紙の構成：アサーション行動尺度，アサーション態度尺度（対友だち，対家族），自尊感情尺度，EAT-26，EDI 過食項目

2-2. 結果と考察

各因子の関係について検討するため，パス解析を行った。その結果，友人に対するアサーション態度がアサーション行動の【関係形成】に正の影響を与えていた。また，この【関係形成】と【自尊感情】との間には相互的影響が認められた。【自尊感情】が高いほど，摂食障害の中核症状である

【痩身への捉われ感】、【食物に関する捉われ感】、【過食】の低減に影響を与えることが明らかとなった。よって、摂食障害の予防的支援の AT 作成において、自尊感情を高める内容は重要と考えられる。

加えて、家族に対してアサーティブな態度を持つことができるほど、【嘔吐】と【過食】の頻度が低くなるという結果が示された。よって、AT 作成のうえで家族に対するアサーティブな態度を取り入れたプログラム内容は必須であろう。

3. 第 2 研究

3-1. 方法

調査時期：2017 年 9 月～11 月

調査対象者：A 大学の女子大学生 9 名（平均年齢 20.8 歳， $SD=0.4$ ）

調査方法：第 1 研究の統計的な結果をふまえ、筆者が独自に食事に対する葛藤場面でアサーティブな対応をする AT（以下 SAT）を作成した。調査対象者に SAT を実施（週 1 回 90 分，全 3 回）し、図 1 のとおりプレテスト、ポストテストおよび 4 週間後にフォローアップテストを行った。質問紙の内容は第 1 研究の尺度にボディ・イメージ尺度を加えたものであった。



図 1. 研究手続き

3-2. SAT の内容

第 1 回では、摂食障害の講義、3 つの自己表現の講義およびロールプレイ等、第 2 回では、アサーション権の講義、DESC（セリフ作りの 4 つのステップ）の講義、友人との食事に関わる葛藤場面のロールプレイ等、第 3 回では、家族との食事に関わる葛藤場面のロールプレイ等を行った。

3-3. 結果と考察

3 回の各テスト間の得点の比較（1 要因の分散分析）を行った。その結果、自尊感情尺度の得点間に有意な差がみられ、さらに、高められた自尊感情は 4 週間後も低下することなく持続したままであった（図 2）。よって SAT は自尊感情を高める効果が十分にあると言える。

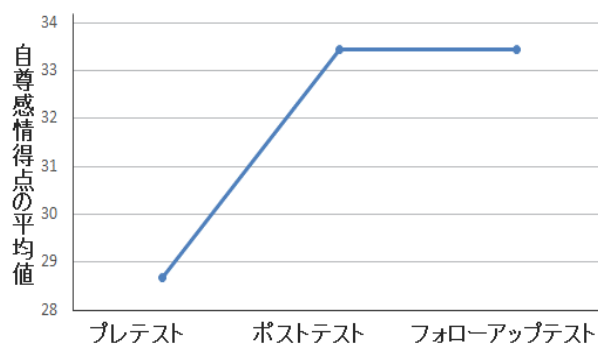


図 2. 各テストの自尊感情得点の比較

次に、SAT の長期的効果を検討するためプレテスト、フォローアップテスト間の得点の比較（ t 検定）を行った結果、アサーション行動尺度の得点間の差に有意な傾向がみられた。よって、SAT の実施がアサーションスキルを高める可能性が示された。

摂食障害傾向の得点は、プレテストとフォローアップテストを比較すると低下していたものの、両者に有意差は認められなかった。水島（2015）によると、対人関係問題の領域を扱う支援法は、直接食行動の変化は促さないため、効果の発現が対人関係への満足度、社会機能、抑うつ症状、自分への信頼感などから始まり、その結果として食行動にも変化が生じると述べている。本研究は週 1 回 90 分，全 3 回という短い期間で行っていることから、摂食障害傾向の低下には回数を増やし、より長期的なトレーニングが必要であることが予想される。

4. まとめと今後の課題

以上の通り SAT は、さまざまな精神疾患に強い関連が指摘され重要視されている自尊感情を短期間で高め、さらに維持する効果を示したことから、臨床的有用性が十分にあると言える。

今後は、摂食障害臨床群への適用についても検討が望まれる。

主要参考文献

- [1] 平木典子 (2009). アサーション・トレーニング——さわやかな「自己表現」のために—— 金子書房
- [2] 水島広子 (2015). 摂食障害の不安に向き合う——対人関係療法によるアプローチ—— 創元こころ文庫

スーパーヴィジョンにおける情緒的サポートに関する研究

—セラピストの共感疲労の視点から—

Emotional support in clinical supervision
—from the point of view of therapists' compassion fatigue—

竹下 亜美

Ami Takeshita

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：スーパーヴィジョン，対人プロセス想起法，共感疲労

Key words：supervision, Interpersonal Process Recall, compassion fatigue

1. 問題と目的

公認心理師が国家資格化し，その教育の充実が重要であるとされている．そこで，本研究では心理師養成の中核であるスーパーヴィジョン（以下，SV）に焦点をあてた．SV は単に臨床実践のノウハウを教授するためにスーパーヴァイザー（以下，SVor）とスーパーヴァイジー（以下，SVee）によって営まれるものではなく，SV 関係や SV の課題や機能といった様々な側面を含んだ協働作業であり，「受けねばならない必須の学習（鏑，2004）」と言われている．これまでは多くの臨床家や研究者によって，臨床家の職業的発達段階に合せた SV を行うことの重要性が提唱されてきた．一方，近年の先行研究からは SV による SVee の発達や心理的側面，ケースへの良い影響や効果があることとその反対に SVee の発達を阻害しかねない SV があることが明らかになっている．このような背景に加えて，近年援助職従事者の職務上のストレスといえる共感疲労が注目されている．共感疲労は援助者本人では気づきにくく避けることのできないものであり，それゆえに SV で教えることが重要であると提唱されている（Figley, 1995）．

本研究は初心者セラピスト（以下，Th）がクライエント（以下，CI）とのかかわりにおいてどのような不安感・困難感を抱き，それらについて SV ではどのような体験をしているのかを明らかにし，気づきにくい共感疲労についての視点を加えて，SV がどのような情緒的なサポートの機能を果たしているのかを明らかにすることを目的とした．

2. 方法

過去に行った SV を録画したものの中から「Th が CI とのかかわりで困難に感じている，あるいは CI とのやりとりで悩んだり考えたりしていることを SVor に開示していたり，SV で扱っている場面」である 10 分間を抽出した（4 組の SV を 2 場面で計 8 場面）．それを大学院生や修了生に提示し SVor の肯定的姿勢と共感性を客観的に評定した．その後 SV の当事者である SVor と SVee に録画データを呈示し，それぞれの主観的な体験について半構造化面接のインタビュー調査を行った．SVee にはインタビュー時に共感疲労尺度の質問紙に回答を求めた．

（1）SVor の肯定的姿勢と共感性についての評定
調査期間：2017 年 9 月 21 日～10 月 18 日
調査協力者：SV を受けている大学院生や修了生 6 名（平均経験年数 1.2 年（SD=0.5），性別は 6 名とも女性，平均年齢 23.8 歳（SD=0.9））．
評定に利用した尺度：SVor の肯定的姿勢と共感性を評定するために，井上ら（2016）が作成した肯定尺度（5 項目）と共感尺度（9 項目）を用いて 7 件法で回答を求めた．

（2）半構造化面接によるインタビュー調査
調査期間：10 月 25 日～12 月 5 日
調査対象者：SVor 4 名（臨床経験年数 20 年～30 年（SD=10.9），SVor 経験年数 0～27 年（SD=9.7），男性 2 名，女性 2 名，年齢は 40 代～50 代）と SVee 4 名（臨床経験年数 1～4 年（SD=1.1），4 名とも女性，年齢は 20 代～30 代）．

インタビューは一対一で実施した。内容は、SVor には SV での意図や方針、SVee の性格傾向や技量について、SVee の困難感はどう捉えていたか、肯定的姿勢や共感性は意識していたか等。SVee にはどのような困難感を抱いていたか、SVor の対応について、SV のセラピーへの影響等。それぞれに SV での両者の関係性についてインタビューした。

3. 結果と考察

本研究では、Th の共感疲労の視点から、それぞれが過去にトラウマとなる体験をしていたり、傷ついた体験をしていたことが明らかとなった。また、その体験はケースの内容や状況に関係なくとも振り返った方がよいものとして Th 自身が捉えていたのであった。つまり、4 名の Th の共感疲労状態は異なり、必ずしもケースに影響があるものではなかった (図 1)。

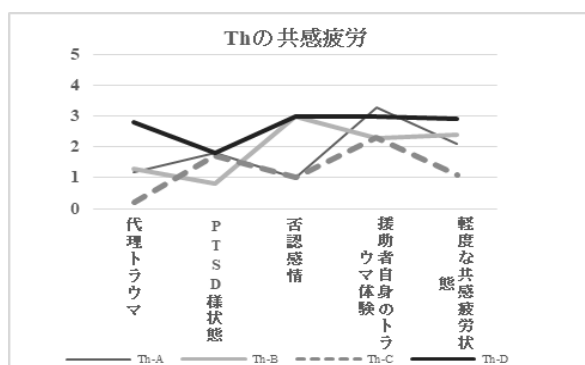


図 1. 各 Th の共感疲労尺度の平均値の結果

初心者においては、CI のことに感情が巻き込まれることで、Th 自身の疲労感や負担感を強め共感疲労へと陥る原因となり、それと同時に他者理解を妨げ、他者を援助する際の弊害になる (武田・萩野, 2016)。そのため「巻き込まれ」は問題とならない程度のバランスをもつことが重要であるが、本研究では対象者が共感不全で困難感を抱いていたことから、Th 自身のトラウマとなる体験と CI の問題が重なるケースでは Th 自身の心理状態により注意深くなる必要があると考察された。また、共感疲労が自然な副産物 (Figley, 1995) とはいえ、それに耐えられない状態にならないためには、SV で SVor と巻き込まれることのつらさについて扱い、「受け止めてもらえた」という体験をすることや同僚とこまめに関りをもつことが重要であると推察された。

初心者が困難感を抱く事象は共感疲労のような状態以外にも様々であった。面接への自信のなさや攻撃的な指導によるおびえ、逆転移の問題、共感できないこと、見通しが立たず指導内容も理解できない状態、CI に対するネガティブな感情を抱くこと、CI が危険な行動に移る可能性があることなどが挙げられた。これらの困難や問題を抱える SVee は、SVor の支持的な態度に支えられる場合や SV でのやりとりが操作的で目的の共有がなされておらず混乱や不安を抱く場合、SVor の共感的な関わりが不安を一時的あるいは部分的に軽減させる場合といった SV を体験していた。そのような SV で SVor の肯定的姿勢と共感性は、意図されたものではないことが明らかとなり、場面による違いや SVor が心掛けていることによってその程度は異なることも明らかとなった (図 2, 3)。

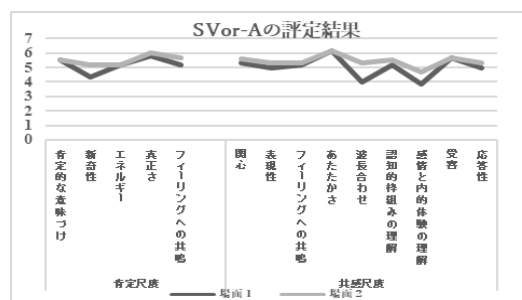


図 2. SVor-A の評価結果

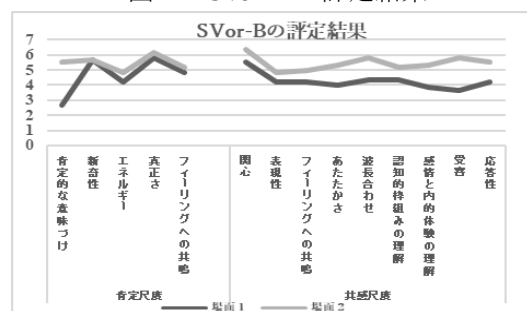


図 3. SVor-B の評価結果

本研究では、SV が SVee にとって支え、つまり情緒的なサポートとして機能するには、SVor が「一貫した態度」であることが重要であると考えられた。また、SV を受けること自体が情緒的サポートとして機能していたと考察されたが、SV の情緒的サポートとしての機能にはいくつかのパターンがあることも明らかとなった。

主要参考文献

- [1] 鍾幹八郎 (2004) . 心理臨床と倫理・スーパーヴィジョン ナカニシヤ出版

自己心理学の観点から見たキレル現象について

—自己対象体験, 自己愛的抑うつ, 自己愛的憤怒との関連—

“Kireru”phenomenon from a self psychological point of view
—Selfobject experiences, narcissistic depression and narcissistic rage—

原田 奏江

Kanae Harada

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード: キレル現象, 自己心理学, 自己対象体験, 自己愛性抑うつ, 自己愛的憤怒

Key words: “Kireru”phenomenon, Self psychology, Selfobject experiences, Narcissistic depression, Narcissistic rage

1. 目的

近年, 青少年が衝動的・破壊的行動をとる“キレル”現象が問題視されてきた(宮下ら, 2002).

“キレル”という言葉は, 我慢の限界で爆発する激怒を意味する事もあるが些細な不満感を表す事もあり, 単に他者へ向く「制御不能な激怒」だけでなく, その怒りが自己に向く「抑うつ的な負の感情」も生起する包括的概念であった(竹端ら, 2010).

これらの類似概念で, Kohut の自己心理学の観点に自己愛の傷つきやすさを示す自己愛的憤怒と自己愛性抑うつがある(上地ら, 2004). 彼のいう「自己に役立つべく利用される自己対象」との体験で自己愛が十分満たされないとその後も誇大的欲求が生じる. それが更に満たされない時, 制御不能で解消されない自己愛的憤怒や, 憤怒が自己へ向けられる自己愛性抑うつが生じると考えられた. そして宮下ら(2002)は, “キレル”現象の感情面は憤怒や抑うつ of 精神病理学的形態も含むとし, 特に抑うつに耐えられる力の発達を重視した.

そこで, 本研究では, Kohut の自己対象体験と自己愛的憤怒・自己愛性抑うつに着目し, “キレル”現象の感情面における生起過程の一部を明らかにするため, 探索的に量的研究を行った. 即ち, 探索的仮説として, ①「過去の自己対象体験→自己愛人格→“キレル”」, ②「現在の自己対象体験と自己愛人格の交互作用(組み合わせ)→“キレル”」を想定した. なお, 自己愛的欲求が高く, 怒りの表出抑制により抑うつを示しやすい女性を調査対象とした(上地ら, 2004 等).

2. 方法

調査対象者: 青年期以降女子大学生・院生 255 名(平均 22 歳). 調査時期: 2017 年 7 月 12 日-10 月 31 日.

調査方法: 集合・委託調査形式の質問紙調査(表 1).

表1 質問紙の構成と調査内容

1 フェイスシート(教示文, 回答方法など)

2 [設問1]自己対象体験尺度(緒賀, 2001; 小林, 2006より改定):

[設問1-1]回答者に「自分にとって人生の中で最も影響を受けた人」を想起させ, 人物の選択肢の中から, 一人だけ想起した人を選択させた.

[設問1-2]設問1-1で想起した鏡映(例: 自分に何か嬉しい事が起きた時, それを我が事のように喜んでくれる人)・双子(例: 自分と共通した考え方や思いを抱えていると感じる人)・理想化(例: 自分にできないことができ, その人を知っていることに誇りを感じられる人)との自己対象体験を尋ねた. 計16項目, 3件法.

3 [設問2]自己愛人格尺度(NPS, 谷, 2004)の「自己愛的憤怒(例: 自分の意見を少しでも否定されると, すぐ頭に来る)」と「自己愛性抑うつ(例: ちょっとしたことで自信をなくし, 落ち込んだりする)」の2因子. 計17項目, 7件法.

4 [設問3]キレル時の感情尺度(竹端ら, 2010):

「感情制御不能(例: 周りが見えなくなってしまう)」と「負の感情(例: 虚しくなる)」の2因子. 計22項目, 5件法. 注)回答者の精神的負担を考慮し, 教示文でキレル時を「普段のちょっとしたイライラやムカつきを感じた時」と定義し想起させた.

5 [設問4]年齢 その他, 意見・感想

3. 結果

[設問1-1]人物の分布は, 順に, 母親 49.4%($n=126$), 友人 10.2%($n=26$), 先生 8.6%($n=22$), 父 6.3%($n=16$), 恋人・メディアを通じて知っている人 4.3%($n=11$), 兄弟姉妹 3.9%($n=10$), 先輩 3.5%($n=9$), 祖父 2.7%($n=7$), 祖母 2.0%($n=5$), その他の知り合いの人 1.2%($n=3$), 親戚 0.8%($n=2$), 後輩は無回答であった.

そこで, 約半数の割合を占めた「母親」と, 身近な他者としてまとめた「友人・先輩・恋人」($N=45$) カテゴリーについてのみ, 各分析を行った.

過去の自己対象体験→自己愛人格→“キレル”

(重回帰分析結果, 図 1):

自己愛人格とキレた時の感情との関連(①～④パス): ①～③のパスは, 全対象者と主要人物カテゴリーで共通した。即ち, 自己愛的憤怒から感情制御不能($\beta=.29, p<.001$ 等), 自己愛性抑うつから感情制御不能・負の感情へ正の影響が見られた($\beta=.35, \beta=.53, p<.001$ 等)。一方, 全対象者でのみ自己愛的憤怒から負の感情へ負の影響が見られた(④パス $\beta=-.16, p<.05$)。

自己対象体験とキレた時の感情との関連(⑤パス): 全対象者でのみ, 双子自己対象体験から負の感情へ正の影響が見られた($\beta=.13, p<.05$)。

自己対象体験と自己愛人格, 及びキレた時の感情との関連(⑥パス): 「友人・先輩・恋人」カテゴリーでのみ, 理想化自己対象体験から自己愛性抑うつを経て感情制御不能・負の感情に対する一連の正の影響が見られた($\beta=.41, p<.01; \beta=.30, p<.05; \beta=.41, p<.01$)。

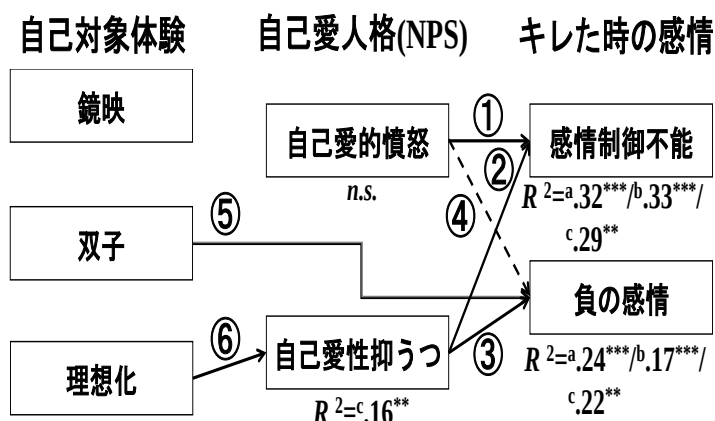


図1 全調査対象者と、「母親」及び「友人・先輩・恋人」カテゴリーにおける自己対象体験が自己愛人格(NPS)を経てキレた時の感情に及ぼす影響についてのパスダイアグラム
注) * $p<.01$, ** $p<.001$ 実線: 正の影響 点線: 負の影響

説明率: ^a全調査対象者/^b「母親」カテゴリー/^c「友人・先輩・恋人」カテゴリー

現在の自己対象体験と自己愛人格の交互作用(組み合わせ)→「キレる」(分散分析結果):

全対象者と主要人物カテゴリーにおいて, 自己対象体験と自己愛人格間でのキレた時の感情得点の差を検討した。結果, 負の感情について, 自己対象, 鏡映高低により結果に相違があったが, 自己愛性抑うつ高条件の方が低条件よりもキレた時に負の感情が高かった($F(1, 248)=31.01, p<.001$ 等)。また, 理想化高低に関わらず, 自己愛性抑うつ高条件の方が低条件よりも感情制御不能得点が高かった($F(1, 250)=26.42, p<.001$ 等)。つまり, 自己愛性抑うつ高条件で, キレやすい傾向が見られた。

一方, 鏡映高, 自己愛的憤怒高条件が負の感情は高く, 鏡映低, 自己愛的憤怒低条件の方が負の感情は高かった($F(1, 41)=7.59, p<.01$ 等)。つまり, 鏡映, 自己愛的憤怒については交互作用により, 負の感情が逆の結果となり一貫しなかった。

4. 考察と今後の課題

以上より, 自己愛人格(憤怒・抑うつ)とキレた時の感情(感情制御不能・負の感情)との関連では一貫した結果が得られた。ただし, 自己対象体験(鏡映・双子・理想化)と自己愛人格との関連では予想に反した正の影響が見られた。また, 現在の自己対象体験と自己愛人格の交互作用(組み合わせ)では, 自己愛性抑うつ高条件でキレやすい傾向があったが, 自己愛的憤怒では結果が一貫しなかった。

つまり, キレた時の感情は, 過去と現在の自己対象体験の両方が自己愛人格を媒介して影響する可能性が示唆された。そのため今後さらなる検討が必要であるが, 少なくとも自己対象体験と自己愛人格から「キレる」現象の一部は説明され得ることが示唆された。幼児期に安心感をもたらす自己対象体験が十分でないと抑うつが高く, それを緩和させる自己対象を希求し続けるものの, 自己愛の脆弱さで適度に自己対象を利用できない。そうした人が, キレた時に感情制御不能状態となり, 負の感情が持続する可能性が考えられる。

今後の自己対象体験と自己愛の病理の検討では, ①より発達早期の自己対象との体験を明確に尋ねる事, ②健全な野心・有能感や自己主張性を表す自己愛の誇大的側面も含めて自己対象体験との関連を検討する事が必要だろう。

付記

本研究は, 大妻女子大学生命科学研究倫理委員会の承認(受付番号 29-011)と, 同大学人間生活文化研究所平成 28, 29 年度の大学院生研究助成(B)(課題番号 DB2830, DB2928)の研究助成を受け行った。

主要引用文献

- [1]上地雄一郎他 (編) 小塩真司他 (2004). もろい青少年の心——自己愛の障害 北大路書房.
- [2]宮下一樹他 (編) 青木 一他 (2002). キレる青少年の心——発達臨床心理学的考察 北大路書房.
- [3]竹端佑介・永田陽子 (2010). 大学生における「キレ」行動と「キレ」感情に関する研究——質問紙からの検討 駒澤大学心理学論集, 12, 7-12.